写真紹介－17「国立駅備付 善意の傘」（1959・昭和34年頃）と国立駅・矢川駅・谷保駅

紹介写真　「国立駅備付」と記された雨傘：1959年頃

はじめに

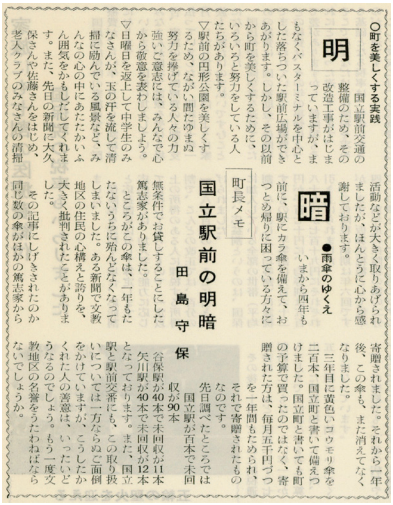
国立市広報担当から当館に移管された写真資料からピックアップしてのご紹介。今回は、国立駅に備えつけられた雨傘の写真を紹介します。

撮影年代はひとまず「1959（昭和34）年」と推定しています。1959年といえば、上皇・上皇后両陛下が4月10日に御成婚された年。結婚パレードがテレビで生中継されましたが、この日に間に合わせるべく4月1日に8社のテレビ局が開局し、テレビ受信契約が200万台を突破しています。この生中継によってテレビの普及が促進されたとも言われています[1]。そんな年に撮影されたであろう1枚です[2]。

この写真の存在は以前から知ってはいたものの、撮影された内容がはっきりせず、撮影年代を探る手がかりもなしという状況でした。詳しい内容には触れず、「こんな写真がありますよ～」とただただ紹介する手もあるのでしょうが、それでは学芸員としてあまりにも無責任かと。不真面目な日々を消費している私としては珍しく、そんな真面目な思いもあって、今まで紹介できずにいた1枚です。それでは今回スッキリと判明したので紹介に及んだかというと、さにあらず。結局よく分からない、というのが正直なところではあります。ただ、調査内容を提示して紹介することで、もしや何かの情報をご提供いただけるかも、という邪まな思惑と淡い期待なんぞをナイマゼにして、今回の紹介とあいなりました次第です。話が色々と飛び回ってどこに着地するのか書いている本人すら分からないのですが、お付き合いいただけましたらコレ幸いでございます。

1-1. 善意の傘のゆくえ：町長メモから

先日、初代国立市長であった田島守保氏の著述を確認していたところ、とある記述に目が留まりました[3]。それは「雨傘のゆくえ」と題され



○町を美しくする実践

明暗

●雨傘のゆくえ

町長メモ

国立駅前の明暗

田島守保

資料1.『広報くにたち』№.144　3面 掲載

1　世相風俗観察会編『現代風俗史年表 昭和20年（1945）～平成12年（2000）』（河出書房新書、2001年）118頁、西井一夫編『昭和史全記録』（毎日新聞社、1989年）628頁。

2　この紹介文掲載の写真や資料等で、提供先の記載がないものは当館所蔵の資料です。

3　田島守保『町づくりと先達』（学陽書房、1971年）268頁。

たもので、「町長メモ　国立駅前の明暗」として1964（昭和39）年11月1日付の『広報くにたち』（国立町報）№.144に掲載の記事（資料1）でした。

この記事では、1960（昭和35）年のこととして、「駅にカラ傘を備えて、おつとめ帰りに困っている方々に無条件でお貸しすることにした篤志家がありました」と紹介し、その傘が1年足らずでほぼなくなってしまったことを述べています。その後に他の篤志家からの寄附があったようですが、それも1年後には紛失。さらに、「三年目」とあるので1963（昭和38）年かとみられますが、またもや傘が寄附され、その黄色い傘200本へ、今度は「国立町」と書いて備えつけたものの、結局100本中90本が国立駅では未回収の状態に。そんな状況に「もう一度文教地区の名誉をうたわねばならないでしょうか」と田島氏は嘆いています。この記事では、どうも篤志家による傘の行方について新聞報道がなされていたような記述があります。そこでくにたち中央図書館による『国立市に関する新聞記事索引』を漁ってみたところ、幸いにも2件の記事がヒットしました[4]。

1-2. 善意の傘のゆくえ：新聞報道から

まずは、1962（昭和37）年7月22日付の『毎日新聞』の記事を紹介しましょう。

駅や交番に親切ガサ

国立町の一老人が寄付

国立町の中央線国立駅に百本、南武線谷保、矢川両駅に四十本ずつ、国立駅前交番に二十本の親切ガサがこのほど備えられた。このガサは、一週間ほど前、同町に住むという六十才ぐらいの男の人が町役場に〝雨で困っている人に貸してあげて下さい〟と名をかくして寄付してきたので、同町で〝あす返しましょう…。国立町〟と墨書、町内の三駅と交番に配置したもの。

国立駅の場合、降り続いた雨ですでに二百人以上の乗降客がこのカサを利用したがほとんど回収され、駅員も〝さすが文教地区だけに回収率は上々です…〟と喜んでいる。

親切ガサがずらり＝国立駅で

資料2.『毎日新聞』都下毎日　1962年7月22日　12面
資料提供：国立国会図書館（一部加工）

この記事では、7月中旬頃に国立町在住の60歳ぐらいの男性が匿名で傘200本を町役場へ寄附し、その傘へ町が「あす返しましょう…。国立町」と墨書して、中央線国立駅（100本）・国立駅前交番（20本）・南武線谷保駅（40本）・同矢川駅（40本）へと備え付けたことが記されています。この時点では傘は設置されたばかりのようですが、国立駅では既に200人以上の乗降客が利用したものの、その殆どが回収されていると報じています。

そしてもう1点は、2年後の1964（昭和39）年11月17日付の同じく『毎日新聞』の記事です。

戻らぬ〝善意のカサ〟

百六十二本、どこへ

国立駅　貸し出しをやめる

資料3.『毎日新聞』東京版多摩　1964年11月17日　16面
資料提供：国立国会図書館（一部加工）

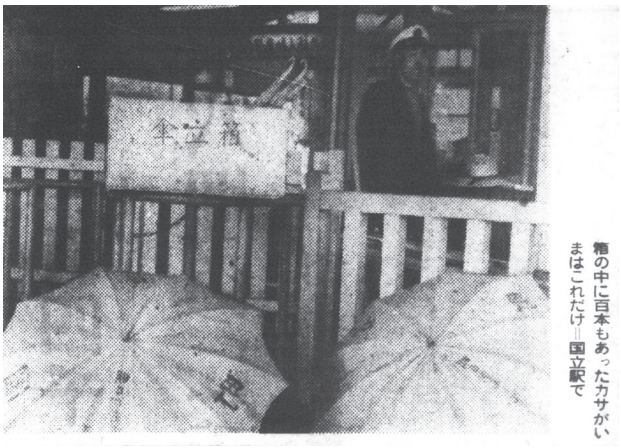
この記事では、町の篤志家が贈った傘200本のその後が報じられています。その傘は「黄色い小型のもので、大きく〝国立町〟と書かれ〝あす返しましょう〟と注意書までしてあるもの」だったとのこと。中央線国立駅（100本）・南武線谷保駅（50本）・同矢川駅（50本）に設置された傘のうちで、現在残っているものが38本。国立駅では100本中たった5本しか残っていないため、傘の貸出しを中止にすることになったと述べています。

こちらは田島町長が苦言を呈した「町長メモ」からほぼ半月後の新聞報道ですが、田島町長は3駅で67本（内国立駅は10本）の傘が残存しているとしていましたから、短期間で未返却の傘が更に増えてしまったようです。

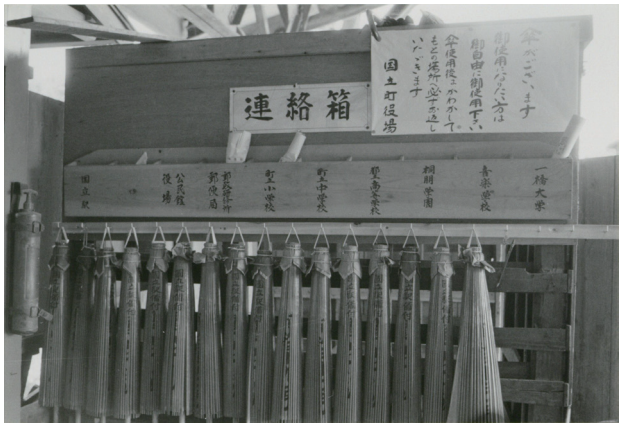
紹介した2点の新聞記事には、幸運なことにいずれも写真が掲載されています。その掲載写真をよぉ～く見てみると、どうも冒頭で紹介した写真とは傘

4 『国立市に関する新聞記事索引1』（くにたち中央図書館、1984）17頁・23頁

親切ガサがずらり＝国立駅で



箱の中に百本もあったカサがいまはこれだけ＝国立駅で



資料 2・3 の掲載写真（上・中）と紹介写真（下）の比較

や置き方が違っているような感じがするのですが、どうでしょうか。

資料 2・3 の写真は、新聞掲載のものであるため被写体が鮮明ではありませんが、写っている傘は洋傘のようです。篤志家が贈った傘を、記事では「こうもりガサ」（資料 3）と表現している点からも洋傘と考えられます。傘は貸出用とみられる「傘立箱」に入れられ（資料 3）、吊るされている傘は柄を上にして掛けられている（資料 2）とみられます。

これに対して、冒頭の紹介写真では「国立駅備付」と記された唐笠（番傘）が写されています。写真の中では 20 本掛けられるフックがあり、掛かっている 16 本の傘は、頭を上にして頭の紐でフックに吊るされています。掲示の説明書きからすると、ここから傘を借りていって、ここに返却するというシステムだったようです。こうして比較すると、紹介写真にある傘の貸出しは、2 つの新聞記事にあるものとは別物である可能性が高そうです。

資料 3 の記事には、紹介写真と関係するかもしれない話が語られています。それは、国立駅で傘の貸出しが始められるキッカケを記してあるところです。1959（昭和 34）年、当時国分寺在住の会社員の方が「学生のころ国立駅で雨に降られ、タクシー代もなく、困ったことがある」と、国立町へ傘 40 本を寄附したのがキッカケとなって国立駅で傘の貸出しが始まったとされているのです[5]。

先の「町長メモ」（資料 1）で、 1960（昭和 35）年に「駅にカラ傘を備えて、おつとめ帰りに困っている方々に無条件でお貸しすることにした篤志家がありました」と紹介されているのは、1 年の差があるものの、新聞記事が語っている国分寺在住の会社員による傘の寄附と同じ出来事を言っているのではないでしょうか。

こうなってくると、1959 年か 1960 年に寄附された傘がどのようなものであったのか、どのように国立駅に設置されていたのかが気になります。しかし残念ながら、この時の傘の寄附に関してタイムリーに記されたものが見当たらず、いずれの年の出来事かも含めて直接解明できるだけの資料が発見できていません。

1-3. 〝まごころガサ〟：善意の傘との類似点

1959 年に駅へ傘を設置したという話で、目に留まった新聞記事がひとつあります。それが 1959 年 3 月 10 日付の『朝日新聞』の記事（資料 4）です。この記事では、1959 年 1 月に地元の久保地区青年団が 22 本の傘を購入し、南武線の矢川駅へ設置したことが報じられています。そして有難いことにこの記事にも写真が添えられています。

記事に拠ると、設置のために購入されたのは「番ガサ二十二本」で、傘は「駅事務室の板壁につる」されて設置されたようです。写真は、この板壁に吊るされた番傘を写しているとみられます。ちなみに、

5 「町〔国立町：引用者〕では国立駅と同駅前交番に貸し出しを頼み」とされており、この寄附の時には、国立駅と駅前交番のいずれにも傘が備えつけられたようです。

〝まごころガサ〟は健在

南武線 矢川駅 乗客に重宝がられ

国立町郷の国鉄南武線矢川駅に地元の久保地区青年団が公衆用の番ガサ二十二本をふた月ほど前に備えつけた。近くに住むNHKシナリオ作家原田重久氏が〝まごころガサ〟と名づけ、客からひどく有難がられている。公徳ガサのある駅で音から名を馳った中央線武蔵小金井駅では、借りて行った人が返さないため、いまは一本もなくなり、公徳心の欠けた客をなげいているそうだが、ここではいまのところちゃんと全部そろっている。せめて矢川のまごころガサだけは一本も行方知れずにならないよう利用者の〝まごころ〟を借じている。

昨年十月、駅周辺の久保地区青年団が映画会を開きいくらかの利益が出た。普通なら団員五十人ばかりの飲み食いで消えるところだが中村孝司団長ごこら幹部は〝公衆の役に立つことに使おう〟と提案、みなの賛意をきいた結果、矢川駅にガサを備えることになった。正月の十日、一本百八十円で番ガサ二十二本を買い、少し費用が足りなかったのは団費から出し駅事務室の板壁につるした。カサには大きく「矢川駅」と模様がわりに入れ、白ペンキで二本ずつ番号をふった。雨の日は用意のカサ立てを改札口に出し、大学ノートの使用簿をつるして自由に住所、氏名を書いて持って行けるようにした。駅員がたった一人という珍しいいなか停車場なので利用者の面倒は見られないから客にまかせ切りだ。

一月十三日に初貸出があってから三月はじめのいまでに十回ほど計六十二人が〝有難い思い〟をしている。一日の乗降千五百人前後、利用するのは降りた人だけだからざっと七百人が対象、一電車に朝夕ラッシュ時で五十人ばかり、備えつけの本数で十分間に合う勘定だそうで、一日十二本出たのがレコード。午後から雨になった日の夕方は駅へカサを持って迎えに来た人でごった返す風景もなくなった。

青年団の人たちは〝この駅だけは貸ガサが姿を消すことはないと信じます。いたんだらまた団費で新しいのと取替え永久に続けて行きます〟といっている。

矢川駅のまごころガサと名付親の原田重久氏（左）

資料 4.『朝日新聞』都下版　1959 年 3 月 10 日　12 面
資料提供：国立国会図書館（一部加工）

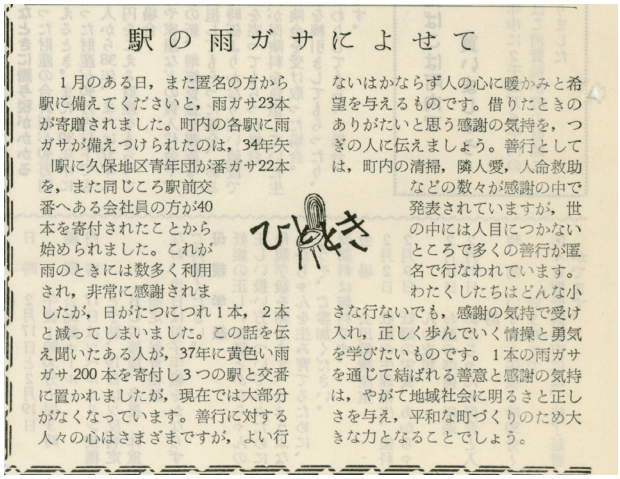
資料 4 の掲載写真

この傘については「近くに住むNHKシナリオ作家原田重久氏が〝まごころガサ〟と名づけ」たとされており、写真には名づけ親の原田氏がその傘を持って写っています。不鮮明ではありますが、板壁の上部には「まごころ傘」と表示されていた様子も確認できます。なお、傘の貸し出しについては、「雨の日は用意のカサ立てを改札口に出し、大学ノートの使用簿をつるして自由に住所、氏名を書いて持って行けるようにした。駅員がたった一人という珍しいいなか停車場なので利用者の面倒は見られないから客にまかせ切りだ」とされていますので、この板壁に吊るされた傘を直接持っていくのではなく、別の傘立てから借用していくシステムになっていたと察せられます。

この記事に添えられた写真には、冒頭の紹介写真と同じく、番傘が頭を上にして吊り下げられた様子が認められます。「まごころガサ」が設置されのは南武線の矢川駅ですから、紹介写真の中央線国立駅とは相違しています。しかしながら、同じような時期に両駅で寄附行為による傘が無料貸出し用として設置されていた点、寄附された傘がそれぞれ「番ガサ」（矢川駅：資料 4）・「カラ傘」（国立駅：資料 1）であった点を考慮すると、冒頭の紹介写真が撮影対象としたものは、1959 年か 1960 年に寄附されて国立駅へと設置された傘だったのではないかと考えてしまうのです。

1-4. 善意の傘の始まり：町報の記事から

今回の写真紹介をなすべく資料を漁っていた時、当館の安齋主任学芸員が貴重な情報を提供してくれました。それは『広報くにたち』№.148（1965・昭和 40 年 2 月 1 日）に掲載された「駅の雨ガサによ



駅の雨ガサによせて

ひとことき

1月のある日，また匿名の方から駅に備えてくださいと，雨ガサ23本が寄贈されました。町内の各駅に雨ガサが備えつけられたのは，34年矢川駅に久保地区青年団が番ガサ22本を，また同じころ駅前交番へある会社員の方が40本を寄付されたことから始められました。これが雨のときには数多く利用され，非常に感謝されましたが，日がたつにつれ1本，2本と減ってしまいました。この話を伝え聞いたある人が，37年に黄色い雨ガサ200本を寄付し3つの駅と交番に置かれましたが，現在では大部分がなくなっています。善行に対する人々の心はさまざまですが，よい行ないはかならず人の心に暖かみと希望を与えるものです。借りたときのありがたいと思う感謝の気持を，つぎの人に伝えましょう。善行としては，町内の清掃，隣人愛，人命救助などの数々が感謝の中で発表されていますが，世の中には人目につかないところで多くの善行が匿名で行なわれています。

わたくしたちはどんな小さな行ないでも，感謝の気持で受け入れ，正しく歩んでいく情操と勇気を学びたいものです。1本の雨ガサを通じて結ばれる善意と感謝の気持は，やがて地域社会に明るさと正しさを与え，平和な町づくりのため大きな力となることでしょう。

資料 5.『広報くにたち』№.148　1 面 掲載

せて」という記事（資料 5）です。

ここでは冒頭で 1965 年 1 月、駅へ設置するための傘 23 本が匿名でまたも寄附されたことが記され、その後にそれまでの経緯が示されています。それに拠ると、1959（昭和 34）年の久保地区青年団による矢川駅への「番ガサ 22 本」の設置と、「同じころ駅前交番へある会社員の方が 40 本を寄付されたこと」が、各駅へ傘が設置された始まりであるとしています[6]。

この記事による国立駅前交番への 40 本の傘の寄附とは、1959 年か 1960 年のいずれかになされたであろう傘の寄附行為を指していると考えられます。その時期については、1959 年の矢川駅への設置と「同じころ」、各駅へ傘の設置が始められたとしています。こうなると、傘の寄附行為と国立駅への設置は、1959 年になされたのではなかろうかと考えられてくるのです。

1-5. 善意の傘：まとめ

国立町報や新聞報道をつなぎ合わせ、しかもかなり類推も加えてではありますが、冒頭の紹介写真は 1959 年頃に撮影されたものと推定します。

もちろん、この傘が設置された当初にこの写真が撮影されたという確証はありません。その後に撮影されたものかもしれませんが、現状ではそれ以上に年代を特定できるものがありませんので、ひとまずこの年代で提示させていただきました。

篤志家や青年団の寄附によってはじまった各駅での傘の貸出し、これはいずれも昭和 30 年代半ばから始まっていたようです。この年代のことであればまだご記憶の方もいらっしゃるのではないでしょうか？

何かしらご存じの方がいらっしゃいましたら、是非とも当館まで情報をお寄せください。皆さんからの情報が、過去の出来事をよりリアルな、より生きた素材へと昇華させてくれます。何卒よろしくお願いいたします。

2. 善意の傘が設置された頃の駅舎を探る

1872（明治 5）年 10 月 15 日に新橋・横浜の両停車場間で列車の運転が開始されてから、今年（2022 年）はちょうど 150 周年となった節目の年です。鉄道開業 150 年を記念した様々なイベントが各地で開催されています。

加えて、国立市にある JR 南武線 矢川駅でも、今年は開業 90 周年を迎えた記念すべき年にあたっています。矢川駅では、5 月に開業 90 周年記念イベント『駅からハイキング』（5 月 6 日～同 10 日）が開催され、5 日間の開催ながら 1,000 人弱の方がご参加になったようです。また当館でもこれに合わせて、『谷保駅と矢川駅』と題したパネル展示（5 月 6 日～同 22 日）を開催しておりました。

このように、鉄道に関する記念が二つも重なっている年ですから、先に紹介した善意の傘が設置された頃の駅（駅舎）はどんな様子だったのか、写真資料を中心にご紹介します。

2-1. 中央線 国立駅舎

2020（令和 2）年 4 月 6 日より国立駅南口にオープンした旧国立駅舎は、現在 2 周年目を迎えています。この旧駅舎は、1926（大正 15）年 4 月 1 日に開業した当初の姿に復原して再築されています。

写真 1. オープン 2 周年目の旧国立駅舎：2022 年 4 月撮影

a. 昭和 30 年代半ば頃の国立駅舎

善意の傘が設置された昭和 30 年代半ばの国立駅舎は、創建後 35 年程の歳月が経過した姿であったことになります。当時の国立駅舎が撮影された写真は、多くは確認できていません。まずは国立町報掲載の写真から、1960（昭和 35）年 5 月頃の撮影と考えられる写真をみていきましょう。

6　この記事では、「ある人が、37 年に黄色い雨ガサ 200 本を寄付し 3 つの駅と交番に置かれましたが、現在では大部分がなくなっています」と述べています。先に紹介した 1964 年 11 月 17 日付の『毎日新聞』の記事（資料 3）では、駅での傘貸出しを中止することになったと報じていましたが、1965 年のこの町報の記述からすると、その後もまだ続けられていた可能性がありそうです。

写真 2. ﾌｧｲﾙNo. 009_090_02[7]

写真 2 は、1961（昭和 36）年 1 月 1 日発行の『町報特集号』（国立町報 第 83 号）の 4 面に掲載された 1 枚です。

この町報特集号は、「建設的いぶきに燃えた昭和 35 年をもう一度ふり返って見ることも意義あることと思い、この 1 年を写真で紹介いたしました」として、「昭和 35 年のあゆみ」と題した 4 頁にわたる特集号です。

資料 6. 国立町報 第 83 号 町報特集号

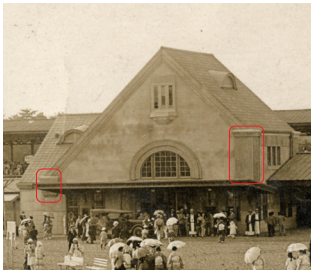
特集号では写真 2 に「駅前広場補修工事（5 月 15 日完成）」とタイトルを付しています。この写真と一連で撮影された中には国立駅舎が写っているものがあります。写真 3 ～ 5 がその 3 枚です。

これらの写真では、開業から 35 年を経た国立駅舎の外観を観察することができます。写真 6 の創建当初の外観と比較すると、正面の壁の左右に付けられていた角柱型の装飾（付柱）が撤去されている点が確認できます。

国立市の旧国立駅舎再築関係の資料に拠ると、この付柱は 1952（昭和 27）年 5 月の駅舎の修繕工事で、外部壁のセメントガン吹付仕上げがなされた際に撤去されたと考えられています。写真 3 ～ 5 が撮影された時点では、付柱が撤去されてから 8 年余りが経過していたことになりますが、付柱のあった部分の壁面をよく見ると、まだその痕跡が残っているのが分かります。

（上）写真 3. ﾌｧｲﾙNo. 009_090_03、（中）写真 4. ﾌｧｲﾙNo. 009_090_05
（下）写真 5. ﾌｧｲﾙNo. 009_090_07

写真 6. 国立駅前（1926 年）



7 「ファイルNo.」とは、営利を目的としない写真の利用に供するため、当館に保存されている電子データのファイル番号を表示したものです。

b．駅名表示板の変化

さらに外観で注目されるのが、正面の庇の上に設置された「国立駅」の駅名表示板の存在です。写真4は駅舎がほぼ真正面から撮影されており、駅名表示板を明瞭に確認できる貴重な1枚です。

国立駅の庇の上に駅名表示板がいつから設置されたのかは詳らかではありません。昭和10年代に撮影された写真で、駅前広場に水禽舎[8]のケージがあった頃のものは、庇の上に駅名の表示はみられません。年代を確認しうる資料の中では、1949（昭和24）年8月15日付の『国立文化』[9]創刊号掲載の写真が、古い時期のものになります[10]。写真資料から鑑みて、駅名表示板が設置されたのは、昭和10年代末から同20年代前半の間であったと考えられます。

資料7.『国立文化』創刊号　1949年8月15日　3面（一部加工）

駅名表示板のその後の変遷についても、資料の制約からまだよく分かっていません。そのため、写真3～5にある表示板がいつ設置されたものか、残念ながら明確にし得ません。

比較できる資料として、1958（昭和33）年7月15日発行の町報特集号の表紙に掲載された写真があります（資料8）。駅舎正面が大きく掲載されており、駅名表示板も確認できます。掲載写真のため

（1）　昭和33年7月15日発行　（町報特集号）

伸びゆく国立　町報特集号

特集号の発刊について

〝町づくり〟かたい言葉でいえば国立町の都市計画は、これまで町報に書いたとおりその策定を〝一日も早く実現したい〟と努めてまいりました。しかし、この計画の原案作成は、都推せんの専門家桜井英記氏委嘱中のところ国立を通過する都道や国道の位置が易にきまらないこと、この町に許される諸種の文化施設や用途地域の指定が関係方面との打合せに多くの時間を費し〝四月までとい〟う約束が六月にも実現されないで困っております。先日、〝都市計画協議会で都の山田都市計画部長に伺ったところ、八月中旬には発表されるでしょうということでありました。〝多分その時は市町間の道路も確定し、大体の骨格ができることと思います〟町としては、この原案をそえ上にのせて議会や審議会で検討して頂き関係官庁へ提出の運びとなります。

たゞいま〝町づくり〟の一環としてやっている仕事はいづれも都市計画に織込まれた諸施設、例えば学校その他の文化施設、ガス、上下水道、し尿やゴミの処理施設、道路橋渠等々であります。これら重要施策を実施いたしますについては全町を用途別に地域を指定した後、事業の緩急軽重度を公の討議に附し執行することが最も望ましいのであります。

都市計画樹立の上で全町の理解と協力を戴きました〝町づくり〟を推進したいというわれわれの熱意を超えて町の発展と膨脹の速度がこの写真特集にあらわれている現実を了とせられたいのであります。

資料8.『伸びゆく国立』町報特集号

画質が粗く、確実に一致するとは言い難いですが、写真3～5の表示板と同じものとも考えられます。

今回改めて駅名表示板に注目して写真資料を調査したところ、「国」の字が旧字体で表示されたタイプが存在することを確認しました。これは写真3～5、資料8とは異なるタイプの表示板です。

次頁の写真7と写真8の2枚をご覧ください。表示板が「國立駅」となっていることが分かります。

写真7は、駅舎に向かって左脇看板の映画広告から、1955（昭和30）年頃の撮影と推定されるも

8　水禽舎については、当館HPの資料紹介で「国立駅前円形公園：水禽舎」として紹介しています。是非こちらもご覧ください。【当館HP「郷土文化館 机上のメモから」】https://kuzaidan.or.jp/province/curator-info/20171101-1/

9　『国立文化』は地域組織の会報として創刊され、街の出来事を報じる地域新聞としての役割を担っていたものです。

10　『国立市史　下巻』（国立市、1990年）197頁には「昭和20年頃」とされた国立駅舎の写真が掲載されており、庇の上に駅名表示板が設置されているのを確認できます。しかしながら、この掲載写真が現在いずこに所在しているのか分からず、年代設定の根拠がどこにあるのかはっきりしていません。

（上）写真 7. 国立駅（1955 年頃）
（下）写真 8. 文教地区看板と国立駅
（昭和 20 年代末～昭和 30 年代初め）

写真 7 の駅名表示板部分の拡大

のです[11]。写真 8 も写真 7 と同じ頃の撮影ではないかと考えられますが、年代を絞り込む手掛かりが乏しく、まだ確定できていません[12]。駅舎の付柱が既に撤去されている点からみて、1952（昭和 27）年 5 月以降の撮影であろうと考えられます。また「国立文教地区」の看板が、1955（昭和 30）年 1 月に撮影された写真[13]にあるものと同じ書体と確認できる点から、ひとまず昭和 30 年代初めを下限として推定しています。撮影年代から考えて「國立駅」の旧字体タイプの駅名表示板は、写真 3 ～ 5 のタイプよりも前のものであったとみられます。

さらに撮影年代の特定が可能で、駅名表示板の書体が確認できる写真として、写真 9・10 の 2 点が確認できました。

（上）写真　9. ﾌｧｲﾙ№. 029_287_06
（下）写真 10. ﾌｧｲﾙ№. 039_389_24

写真 9 は、「オリンピック東京大会」の広告塔が立っている点から、1964（昭和 39）年に撮影されたとみられる写真です。写真 10 は、市制祝賀の広告塔が立っている点から、1967（昭和 42）年に撮影されたとみられる写真です。いずれも駅名表示板をよく確認することができます。

この写真 9・10 と、1960（昭和 35）年 5 月頃に撮影された写真 4 の駅名表示板とを比較してみると、微妙ながら書体が異なっていることがお分かりになりますでしょうか（次頁の拡大写真参照）。

写真 4 の書体が若干縦長のフォントであるのに対し、写真 9・10 のものは全体的に正方形に近いフォントが使われています。

特に「立」を比較すると、写真 4 の書体では 1

11　「秋葉の火祭り」「湯の町椿」「警察日記」「第三暗黒街」というタイトルが読み取れます。「第三暗黒街」（1954 年 12 月公開）以外は、1955 年 2 月公開の日活映画とみられます。【日活作品データベース】https://www.nikkatsu.com/search/?media=2

12　写真 8 は、『国立市史　下巻』（国立市、1990 年）264 頁に掲載されていますが、同書でも撮影年代を示していません。

13　平野武利氏より当館に提供された写真のうち、国立駅側から 1955 年 1 月に撮影された写真に同書体の看板が確認できます。この点から、「国立文教地区」の看板は、駅側・円形公園側の両面に表示がされていた看板であったとみられます。

駅名表示板部分の拡大：上から 写真 4、資料 8、写真 9、写真 10

画目がやや長く、4 画目が若干湾曲して片仮名の「ノ」の字形となり、3画目と5画目の間に隙間があって、3･4 画目の下すぼまりがより強調されています。対して写真 9・10 では全体が直線で構成され、1 画目が短く仕立てられています。さらに表示板自体も、写真 4 に比して、写真 9・10 は僅かに縦づまりで、上の枠が幾分太いものであることが確認できます。

これらの相違点から、写真 4 にある駅名表示板と、写真 9・10 にあるそれとは、異なるものと考えられます。

ここまでの比較・検討から、写真 3 ～ 5 にある駅名表示板は昭和 30 年代前半～後半において、国立駅舎に設置されていたものと考えられます。まだまだ資料が不足しており、確認の足りていない点が大いにありますが、現段階の推定として提示します。皆さんからのご指摘・ご批判、資料・情報のご提供を是非ともお願いします。

「そんな細かい事。どうでもいいだろう！」とご叱責をいただきそうですが、斯く言う私も調査していて正直嫌気の指す時がないとは言いません。しかし、このような変遷の把握が他の写真資料の年代の絞り込みに資することがあるのです。資料 9 の絵葉書をご覧ください。

資料 9.『文教地区 国立』絵葉書セットより
（上）「中央線・国立」（下）絵葉書セットのタトウ

これは国立文教地区協会が発行した 8 枚の絵葉書セットの 1 枚です[14]。

まず駅舎に注目すると、付柱が撤去されているので、1952（昭和 27）年 5 月以降の撮影であろうと考えられます。そして駅名表示板をみると、先ほど確認した写真 3 ～ 5 にあるものと同タイプであることが分かります（下の拡大写真参照）。

この絵葉書セットは、1959（昭和 34）年 5 月 1 日発行の国立町報 第 58 号に売出しの記事が掲載されていることから、1959 年 4 月までに撮影された写真に基づいて製作されているものです。このことから、写真 3 ～ 5 にある駅名表示板への変更は、遅くとも 1959 年 4 月までにはなされていたと確かめられます[15]。

駅名表示板部分の拡大：上から資料 9、写真 4

さらに写真 8 と資料 9 の絵葉書を比べてみると、円形公園にある「国立文教地区」の看板も違っているのがお分かりいただけますでしょうか。

写真 8 では「國」と旧字体表記ですが、資料 9 では「国」の表記となり、全体のフォントも異なっています。写真 8 のタイプは、前記註 13 にあるように、1956（昭和 31）年 1 月まで確認されていることから、その後 1959 年までの間に文教地区の看板が変更されていたことになります[16]。

c. 駅舎南面の壁面撤去

善意の傘が設置された昭和 30 年代半ばの国立駅舎について、その外観に着目して他の写真資料と比較してきました。当時の駅舎については、もうひとつ確認しておきたい点があります。

下の 2 枚の写真。1960（昭和 35 年）5 月頃に撮影された写真 4 と、第 18 回オリンピック東京大会の開催された 1964（昭和 39）年に撮影された写真 9 を比較すると相違点があるのですが、お分かりいただけますでしょうか。

（上）写真 4. ﾌｧｲﾙ№. 009_090_05
（下）写真 9. ﾌｧｲﾙ№. 029_287_06

かなり分かり辛いので、比較箇所をそれぞれ拡大したのが次頁の 2 枚です。拡大しても分かり辛いのですが、上下の写真を比較すると、駅舎出入口が変化している点を確認できませんでしょうか。

14　当館の常設展示では、この絵葉書セットを 1954・昭和 29 年頃のものとして紹介しています。しかし、現段階では昭和 30 年代前半とするのがより妥当であろうと個人的に考えています。なお、この絵葉書については、当館 HP の写真紹介（「国立駅舎の屋根塗り替え」）で以前も取り上げています。是非こちらもご覧ください。
【当館 HP「くにたち あの日、あの頃」】https://kuzaidan.or.jp/province/kuni−photo/photo−info/20210504−topic/

15　資料 8 の表示板が写真 4 と同タイプであることが確実になると、1958 年まで遡ることができますが、前記のとおり、現在のところ明確ではありません。

16　国立駅南口の円形公園内に設置された文教地区の看板についても、駅名表示板同様、その変遷がよく分かっていません。資料 9 にあるタイプの看板は、1962 年 7 月 1 日付の『くにたち公民館だより』第 29 号の 1 面掲載写真で確認できます。その後、同年 10 月 1 日付の第 32 号で、「新装された文教地区の駅前看板」として別タイプの看板の写真が 1 面に掲載されていることから、この間に看板が変更されたようです。

写真４では駅舎の正面中央に出入口が設けられていますが、写真９では中央出入口以外にも、その左右の壁が撤去されて開口部に変更されています。

この点を、2000（平成 12）年に国立市から発刊された『国立駅周辺プラン報告書』にある平面図（資料 10）でみてみましょう。同書では駅舎の広間の間取りについて、その変遷を改修図面から次のように述べています。

「昭和 27 年までは窓の部分的な変更程度で大きな変化は見られない。昭和 41 年にはホームからの連絡階段設置に伴い、広間の正面～南東の壁・扉を撤去する大幅な変更が見られる。このため広間の『待合室』としての性格は薄れ、増加した乗降客の動線を優先した『コンコース』に変貌している」[17]

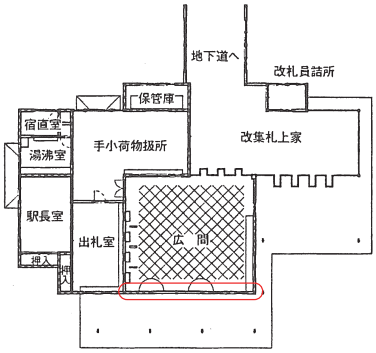
同書では、創建当初から 1952（昭和 27）年頃までの広間が、「幅２間の両開戸と大壁に囲まれた空間」であり、「出改札と同時に待合室の機能」を有していたとしています。それが駅利用客の増加により、人の流れを重要視した変更が加えられたことで、空間の要素に変化が生じた点を指摘しています[18]。

この変更については、1967（昭和 42）年の市制施行当時の駅舎の写真（写真 11）をみると、駅舎前面（南側）の正面入口の扉とその左右の壁が撤去されているのがよく分かります[19]。

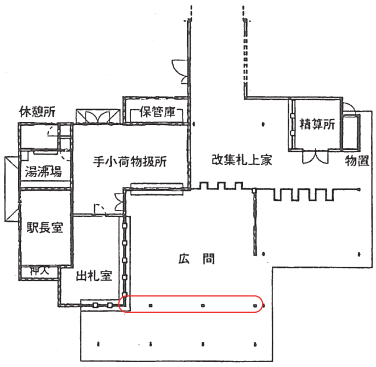
また、壁の撤去に伴って駅舎中央入口の東脇にあった売店が、駅舎東側の側面へと移動しているのも確認できます。

報告書では 1966（昭和 41）年に壁・扉を撤去したと述べていますが、写真９でご確認いただいたように、既に 1964（昭和 39）年には撤去されています。

さらに今回の調査で、別の資料にもその様子が撮影されているのを確認しました。



平面図（昭和２７年）



平面図（昭和４１年迄）

資料 10.『国立駅周辺プラン報告書』（国立市、2000 年）「平面変遷図」より抜粋・一部加工

写真 11. ﾌｧｲﾙNo. 039_390_01

まず写真 12 を紹介します。

写真 12 は円形公園に「祝 国立町制施行十周年記念」の広告塔が立っていますので、1961（昭和 36）年頃に撮影されたとみられる写真です[20]。

駅舎正面東側の壁は確認できませんが、正面入口西側の壁面上部が写されています。この写真からは、既に西側の壁が撤去されているようにみえるのですが、いかがでしょう。

17　『国立駅周辺プラン報告書』（国立市、2000 年）10 頁

18　引用部分は前掲註 17 に同じ。

19　報告書にある 1966 年迄の平面図では、駅舎東面の壁のうち、南側の半分が撤去されていますが、写真 11 からは判断できません。1964 年８月頃の撮影とされる写真（ﾌｧｲﾙNo. 027_276_12）では、この部分の壁が撤去されてない様子がうかがえるため、この東側の壁の撤去時期については更なる調査が必要です。

20　国立町制施行 10 周年記念祝賀式典が、1961 年 11 月３日に東区公会堂（現在の国立第一中学校体育館のところに当時あった建物。1968 年に焼失）で開催されています。その後、行政展示会や町民のつどいといった各種記念行事が同年に行われました。

（上）写真 12. ﾌｧｲﾙNo. 015_155_06　（下）写真 12 の部分拡大

写真 4 では入口西側の壁はまだ撤去されていませんので、駅舎前面の壁の撤去は、写真 4 の撮影された 1960（昭和 35）年 5 月より後、写真 12 の撮影された 1961（昭和 36）年までの間に行われたことになります。

さらに、この変更が明らかに確認できる写真もみつかりました。それが、町制施行 10 周年記念として発刊された『町勢要覧 1961 年版』に掲載されている写真（写真 13）[21] と、これと一連で撮影された写真です（写真 14・15）。

いずれの写真も朝の通勤・通学時間帯に、国立駅南口改札辺りの様子を、駅舎外側の庇の下から撮影したものです。

『町勢要覧』では写真 13 をトリミングして掲載してあるため、掲載写真からは駅舎の中央出入口部分しか確認できません。元の写真にあたったところ、出入口東側（向かって右側）の壁が撤去されているのが確認できました。

写真 14 で左側にみえる柱は、写真 13 の右側の柱と同じものです（元来の出入口の東側柱）。写真 14 からは、出入口東側にあった壁が撤去されていることが明瞭に確認できます。

写真 15 では、元来の出入口の西側柱（向かって左にみえる柱）に続いてあったはずの壁がありません。出入口西側の壁も撤去されていたことが分かります。

いずれの写真にも出入口の扉は写っておらず、扉が撤去されていたことも確認できます。

（上）写真 13. ﾌｧｲﾙNo. 015_146_26
（中）写真 14. ﾌｧｲﾙNo. 015_146_25
（下）写真 15. ﾌｧｲﾙNo. 015_146_27

写真 13 が掲載された『町勢要覧』は、1961 年 11 月 1 日に印刷されており、遅くともこの時点では駅舎は既に変更されていたようです。『国立駅周辺プラン報告書』が示した駅舎広間の「コンコース」化（出入口扉と正面の壁の撤去）は、今まで想定されていたよりももっと早い段階で進行していたことが指摘できます [22]。

国立駅舎に関する写真は、外観を撮影したものに比べて、内部を撮影したものがとても少ない傾向にあります。その中でも広間が「コンコース」化する前、

21 『町勢要覧 1961 年版』（国立町役場企画室、1961 年）10 頁

22 『国立駅周辺プラン報告書』の「資料リスト ①収集図面リスト」では、1958 年 12 月の災害復旧工事と 1960 年 2 月の修繕工事等に関する図面が一覧表示されていますが、いずれも屋根の復旧・修繕に関する図面のようです。昭和 30 年代における駅舎の平面図は提示されていません。

まだ待合室の機能を有していた時期（今回の調査からすれば 1961 年以前）は、管見の限り、確認できたものがほぼ無いという状況です。1950（昭和 25）年の『毎日新聞』（資料 11）に掲載された写真が、現段階では唯一確認し得た資料です。

資料 11.『毎日新聞』都下版 1950 年 1 月 27 日　掲載面不明
資料提供：国立国会図書館

駅舎前面の壁等の撤去時期は、従来、報告書で唱えられていた「昭和 41 年迄」よりも、「昭和 36 年迄」と 5 年ほど遡ることが判明しました。

この点を踏まえて考えると、前半の資料 2 で紹介した 1962（昭和 37）年 7 月 22 日付の『毎日新聞』に掲載の写真は、駅舎前面の扉と壁が撤去された後に撮影されたものであることが分かります。

資料 2 の掲載写真

掲載写真では、手前に傘を広げる人と駅員らしき人物が、奥には自動車がみえています。撮影位置は、駅舎内部から外へ向けて撮られた写真と考えられます。奥が開放的にみえるのは、壁が撤去されていたことによるのかもしれません。ただし、この写真が本当に駅舎内部（広間部分）で撮影されたのか否かは、まだ疑問が残ります。駅舎に附属した改集札上家の辺りで撮影された可能性もあるからです。

いずれにしても、写された貸出用の傘が、国立駅のどこに当時設置されていたのかが分からないと、撮影位置等もはっきりしません。なかなかに謎解きは手強いです。皆さんからの情報提供を願うばかりです。

d. 国立駅北口にあった駅舎

昭和 30 年代半ばの国立駅舎をみてきましたが、この時期の国立駅におけるひとつの大きな変化を紹介しておかなければなりません。

それが 1959（昭和 34）年 9 月の国立駅北口の開設です。当時の町報でも「9 月の三大行事」のひとつとして表紙を飾っています[23]。

資料 12. 国立町報 第 64 号 1 面

住宅の増加に伴って国立駅における北口開設の要望がたかまり、1956（昭和 31）年 6 月には国立・国分寺両町による国立駅北口開設合同委員会がつくられます[24]。同委員会の活動によって、遂に 1958（昭和 33）年 6 月に北口開設が決定、翌年 5 月 12 日には駅舎工事に着手します。急ピッチで進められた工

23　国立町報の第 67 号（1960 年 1 月 1 日）で、「昭和 34 年のあゆみ」と題した『町報特集号』が発刊されており、その表紙で 9 月 1 日の国立駅北口開設を取り挙げています。なお、この特集号によると「北口広場造成工事」の完成は同月 10 日と記しています（4・6 面）。北口の開設祝賀会が催された時には、北口の駅前広場はまだ造成中であったようです（その様子をうかがわせる写真資料も現存しています）。

24　『町報 国分寺』第 31 号（1959 年 9 月 15 日）1 面の「国立駅北口開設にあたって ＝その沿革と今後の問題＝」に拠ると、1955 年 6 月には、国分寺町議会で国立駅北口開設特別委員会が設置されています。

事により、同年 8 月 31 日には北口が完成、9 月 1 日午後 2 時から国立駅北口開設祝賀会が開催されています。北口開設に要した工費（総工費 1,096 万円）については、国立町 30%、国分寺町 70%と、それぞれの町が分担して負担することになったとされています[25]。

次の写真 16 は、国立駅北口開設祝賀会の様子を収めた 1 枚です。

写真 16. ﾌｧｲﾙ№. 007_070_13

なお、当時の回想[26]に拠れば、この祝賀会では北口広場に舞台が設けられ、町が主催した演芸会などが催されたようです。その後、国立の北口町会と国分寺の平兵衛自治会による相談で、舞台を利用した夜間 2 晩の「祝賀民謡おどり」を開催し、「開設を喜ぶ両町民大勢集まり大変なものであった」とその盛会ぶりが伝えられています。

「赤い三角屋根」の愛称で親しまれた国立駅南口の駅舎は、国立市指定有形文化財（建造物）として再築され、現在、「旧国立駅舎」として多くの方に利用されています。

それに対して北口の駅舎については、その建築自体を取り挙げたものは殆どなく、その詳細はよく分かっていません。国立町報に拠ると、「国鉄ではここ一二ケ月中に地下道と北口駅舎の設計（案）を完成させる予定」[27]と述べていることから、当時の日本国有鉄道が設計した駅舎であると考えられますが、調査不足でそれ以上の詳細は不明です。

その国立駅北口駅舎。じっくり眺めてみるとちょっと気になる建物なのです。写真 17 は北口広場越しにみる北口駅舎（1961・昭和 36 年頃）、写真 18 は開設間もない北口をホームから撮影した 1 枚（1959・昭和 34 年 10 月頃）で、手前正面に駅舎の附属屋（トイレ）の屋根が、その右には駅舎の屋根がみえています。撮影時期が少々異なりますが、写真 17 と 18 はそれぞれが反対方向から撮影されたものになっています。

（上）写真 17. ﾌｧｲﾙ№. 015_146_30
（下）写真 18. ﾌｧｲﾙ№. 009_085_28

この建物の屋根に着目してください。

一般的な切妻形の屋根とは逆に、屋根の端が高く、中央に向かって低くなる V 字形状の屋根であるのがお分かりいただけますでしょうか。

北口の駅舎とその附属屋はいずれも片流れ屋根ですが、それが合わさって全体としてバタフライ屋根と呼ばれる特徴的な屋根となる建物だったのです。

写真 19. 国立駅北口（1961・昭和 36 年頃）ﾌｧｲﾙ№. 015_146_31

25 『くにたち』国立町報 第 64 号（1959 年 10 月 1 日）4 面「国立駅北口開設の経過」
26 森田五郎「国立駅北口開設と街路灯点灯」『北口のあゆみ』（国立市北口町会、1990 年）40・41 頁
27 『国立町報』第 41 号（1957 年 12 月 25 日）5 面「北口開設に明るい見通し」

参考資料 . ペイネ美術館（2009 年撮影）

バタフライ屋根の建築として国内で著名なもののひとつに、アントニン・レーモンド氏による「軽井沢・夏の家」があります[28]。レーモンド氏は、新たな帝国ホテル建築のため来日したフランク・ロイド・ライト氏の右腕として帝国ホテル新館（ライト館）の建築に従事した建築家です。

国立駅南口に再築された旧国立駅舎の設計者として、その可能性が示唆されている人物に河野傅（つとう）氏がいます。この河野氏も帝国ホテル新館の建築に従事していました。帝国ホテル新館の建築当時、レーモンド氏と河野氏がすぐ近くで一緒に写っている建築関係者の集合写真なども遺されています。

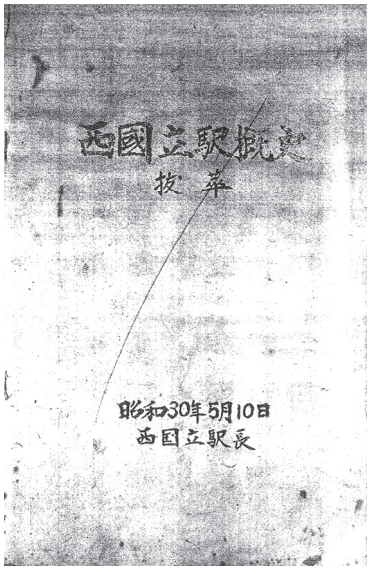
バタフライ屋根の形状から、レーモンド氏や河野氏の関わりにまで話が及ぶのは飛躍が過ぎますが、南口の駅舎に比べて、北口駅舎が語られることがあまりにも少なく、資料調査も進んでいないのが現状です。北口にあった駅舎も改めて見つめ直す必要があると感じています。

北口にバタフライ屋根が採用された理由は明らかではありません。日本国有鉄道が当時設計した駅舎には、このような形状が多かったのかもしれません。あるいは建築費用の制約が影響しているのかもしれません。ただ、ちょっと引っかかっているのが南口の駅舎の存在です。南口の駅舎は「赤い三角屋根」として親しまれていました。その意識が北口のバタフライ屋根の採用に何かしら影響を与えた可能性はないでしょうか。南口と北口で、屋根の形状が対比的に扱われていたのではないか、そんな点がちょっと気になっています。

2-2. 南武線 矢川駅・谷保駅

a. 参考資料の紹介 -1

国立町の各駅へ昭和 30 年代半ばに設置された善意の傘。久保地区青年団によって 1959（昭和 34）年に矢川駅へと番傘 22 本が提供された事例は、前段で 1959 年 3 月 10 日付の『朝日新聞』の記事（資料 4）で紹介しました。この当時の南武線の矢川駅と谷保駅はどんな駅舎だったのでしょうか。その点を探るにあたって、今回参考とした資料について、まず紹介します。



資料 13.『西国立駅概史 抜萃』
国立市公民館図書室所蔵

ひとつめの資料は、国立市公民館図書室が所蔵する『西国立駅概史 抜萃』と題された複写資料（冊子）です[29]。表紙の記述から、この冊子は 1955（昭和 30）年 5 月 10 日に南武線の西国立駅長[30]が表したものとみられます。「まえがき」では、「本冊子は南武線の創立概況と買収〔国有化に伴う 1944（昭和 19）年の買収：引用者〕以降の西国立駅発達の概要を回顧編述して、関係者の努力と苦心の程を偲ぶと共に各駅員に理解を深めて職場改善の資料としていただくためのものであります」と記されており、南武線駅員等に向けた内部用の資料と考えられます。

さらに「あとがき」では、本資料が「抜萃」としてまとめられた経緯が詳しく記されています。それ

28　現在は「軽井沢タリアセン」（長野県北佐久郡軽井沢町大字長倉 217）に移築復元され、「ペイネ美術館」として開館しています。

29　『立川市羽衣町一丁目自治会 創立三十周年記念誌　羽衣会』（羽衣会、1977）65 頁～ 67 頁には、同様の資料に基づいたとみられる記述がなされています。

30　本資料 6 頁の「西国立駅の沿革」において「歴代駅長氏名」が一覧で表記されています。それに拠ると、当時の西国立駅長は 6 代目となる新井寛市氏で、本資料が作成された 2 か月前の 1955 年 3 月 10 日に就任しています。

に拠ると、1950（昭和 25）年 12 月に駅史編纂のために執筆が開始され、1952（昭和 27）年 5 月には『西国立駅概史』が完成しています。しかし、駅史概要に疑問点が残されていたようです。そこで、関係者の参考資料として、要項を抜粋・再編集した「抜萃」を作成し、1955（昭和 30）年 5 月 10 日に西国立駅附近の正楽院で開催された「武蔵溝ノ口地区懇話会」で参加者全員へ配布して、内容改正への協力を依頼しています。

「抜萃」作成時に加筆･訂正が加えられていますが、「疑問の箇所は今后の補訂にまつことにして」とあり、何かしら疑問点のあることがうかがわれます。しかし、どこがその疑問点なのか、現在においては分かりません。

「疑問の箇所」が残されている点を念頭に置いて確認する必要はありますが、『西国立駅概史 抜萃』が貴重な情報を掲載した資料であることは間違いありません。私のような素人ではなく、鉄道関係に詳しい方による分析がなされたら、より有益な情報が引き出せると考えている資料です。

b. 参考資料の紹介 -2

さらにもう 1 件資料を紹介します。それは南武線の矢川駅と谷保駅を含んだ個人所蔵の貴重な写真資料です。

写真 20 は、今年の春頃に国立市広報移管資料を整理していて発見したコンタクトプリント（ベタ焼き）です。このプリントは市報作成にあたって、個人所蔵の写真を撮影したとみられるものです。何枚か同じ写真が重複していますが、国立駅舎の写真が 1 種類、矢川駅・谷保駅の駅舎の写真がいずれも 3 種類あることが確認できます。

このプリントを確認したときに､「やはりそうだったか！」と思うところがありました。それは当館所蔵の写真資料にある南武線関係の写真には、個人所蔵のものが含まれているのではないかと前々から気になっていたからです。

南武線の矢川駅および谷保駅については、いずれも橋上駅となる前の駅舎の写真がとても少ないという状況にあります。国立駅舎が多くの写真に収められているのとは対照的です。当館所蔵とされている内で私が確認しているものは、いずれも数枚しかありません。そしてその殆ど、矢川駅舎に至ってはその全てが、写真 20 のコンタクトプリントに収められているのです。

当館が 2017（平成 29）年に発行した写真集『くにたち　あの日、あの頃』では、29 頁に橋上駅となる前の両駅舎の写真を 1 枚ずつ掲載しています。その掲載写真が、写真 21・22 です。

写真 21・22 はいずれも写真 20 のプリントに含まれています。写真 20 で確認される他の写真についても、当館所蔵資料として以前から利用されているものがあります。このコンタクトプリントを見つけた以上は、そこら辺の事情がどうなっているのかはっきりさせる必要があります。「いつやるの？」と言われたら、「今を逃しちゃならんでしょ」とどこかで聞いたようなフレーズを心でつぶやいて猪突猛進。市報やコンタクトプリントの裏に記載された情報を頼りに、ご所蔵者と目されるお宅を探し出しました。そして誠に不躾ながら、唐突に、何らのツテもアテもなく、押し売りか厄介な勧誘のように訪

写真 20. 国立市報作成時のコンタクトプリント

（上）写真 21. 改築以前の南武線谷保駅：個人所蔵
（下）写真 22. 改築以前の南武線矢川駅：個人所蔵

問。厚顔無恥の本領発揮です。失礼にも突然おしかけた訳ですが、丁寧にお宅に招き入れていただいたばかりか、お話を伺うことができました。追い帰されることも覚悟での訪問でしたが、本当に有難いご対応をしていただいたことに、感謝の言葉しかありませんでした。

このコンタクトプリントにある写真を撮影されたのは、現所蔵者のお父様で、国立市に提供された写真であることがはっきりしました。その内の何枚かが市の広報写真として当館へと移管・収蔵され、その経緯が分からぬままに当館所蔵資料という扱いになっていたと考えられます。

市報等の広報誌や当館の写真資料の保存状況などを丹念に確認していけば、広報が直接撮影した写真ではないことに気づけるかもしれません。しかし写真資料の性質上、資料そのものだけでは、そこまでの確認が難しく厄介なところです。

今回は現所蔵者（撮影者のご子息）からご確認いただくことができ、加えて当館の写真利用に関して、問題なく従前どおりに利用してよいとの誠に有難いお言葉をいただきました。そして貴重なお話も伺うことができました。

現所蔵者のお父様（撮影者）は、日本国有鉄道にお勤めで、1962（昭和 37）年に国立へ引越してこられたそうです。国立に来てお知り合いやお世話になっている方を各駅へと訪ね、その際に撮影したのがコンタクトプリントの写真とのことでした。

これは写真の撮影年代を知る上で大変貴重な情報です。写真集では、写真 21・22 の撮影年月をいずれも「1955（昭和 30）年頃」と紹介していますが、今回お話をうかがえたことで、より的確に資料を把握することができました。写真資料単体では、いつ撮影されたのか特定するのは困難ですが、撮影者や所蔵者の記録や記憶が加わることで、その点が補充されます。今回お伺いした情報が将にそれです。ご所蔵者の寛大なご対応と貴重な情報のご提供については、重ね重ね感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

以上紹介した 2 件の資料に基づきながら、国立市内に所在する南武線の 2 駅、矢川駅と谷保駅をみていきましょう。

2-2-1. 南武線 矢川駅

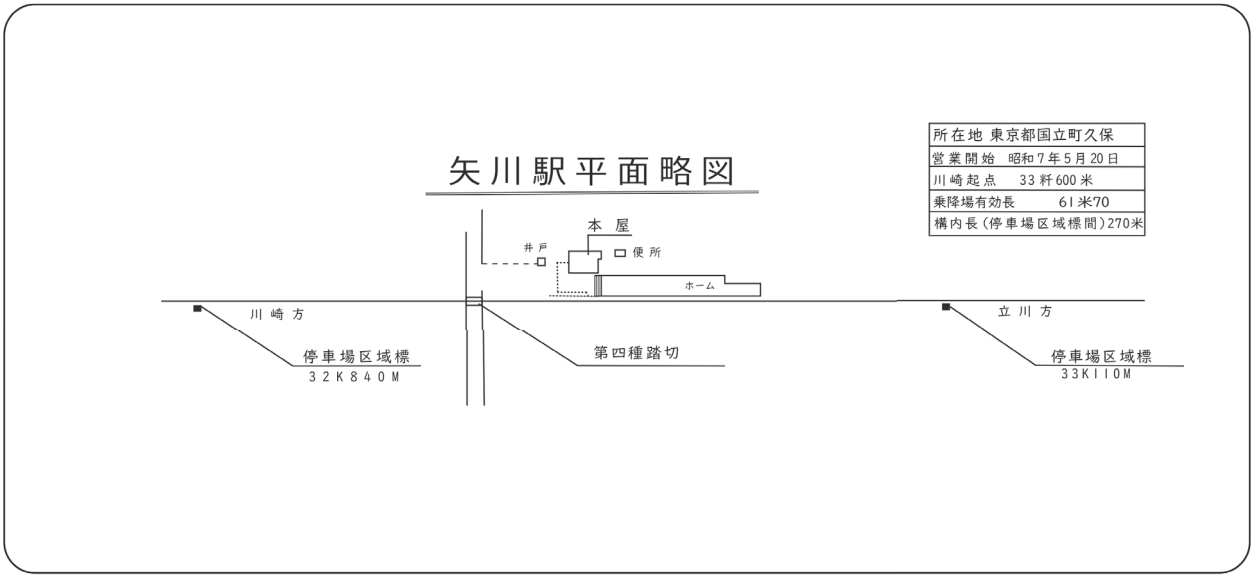
a.1962 年頃の矢川駅

『西国立駅概史 抜萃』（以下、『概史 抜萃』）9 頁の「矢川駅の沿革」に、次のような記述があります。

「社線時代〔国有化前：引用者〕からの駅員無配置駅でありましたが附近有志の協力を得て昭和 22 年 7 月 31 日に本屋並びに便所等を新築し同年 8 月 6 日から駅員を配置して営業を開始いたしました」

『概史 抜萃』のはじめに掲載されている 3 駅（西国立・谷保・矢川）の平面略図に拠れば、矢川駅にはホームの他に、本屋・便所・井戸の設備がなされていたことが分かります（資料 14）。この図には方角を示す印が入っていませんが、線路の右方向を「立川方」、左方向を「川崎方」と記してあることから、上が南側となる図であることが分かります。1947（昭和 22）年に新築された本屋と便所は線路の南側に設けられていたことが確認できます。

先に紹介した個人所蔵の写真資料は、1962 年に撮影されたものですから、平面略図にある各設備が施された後の状況が撮影されていると考えられます。写真 20 には、当時の矢川駅の写真が 3 点確認でき、その 1 点が写真 22 です。残りの 2 点が写真 23・24 になります。



資料 14. 矢川駅平面略図：『概史 抜萃』掲載の図をトレースして作成

当時の矢川駅の辺りはまだ単線でしたが、写真 22 ～ 24 ではいずれも、その線路の左側に駅舎が写っています。駅舎が線路の南側に位置していたことからすると、現在の矢川通り[31]辺りから立川方面（東側）に向けて撮影していることが分かります。なお、資料 14 の平面略図からみて、当時の矢川駅は通りから幾分西側へ入ったところに位置していたようですが、写真でもその状況が確認できます。また、資料 14 で本屋の前面（東側）に設置されている井戸も、いずれの写真にも収められており、1962（昭和 37）年には、井戸と本屋の間に電話ボックスが設置されていたことも確認できます。

写真 22 ～ 24 が撮影された 1962 年に刊行された『谷保から国立へ』[32] では、「この線〔南武線：引用者〕での話題は、東京都の中にある国鉄の駅で、駅員一人という矢川駅である。出札、改札、駅長から何から何まで、一人でやっているのである」と紹介しています。写真 23 では乗客らしき人々が窓口にいる様子が収められていますが、これに対応していたのも、たった一人の駅員であったのでしょう。

（上）写真 23・（下）写真 24. 改築以前の南武線 矢川駅：個人所蔵

写真 22 ～ 24 が撮影された 1962 年には、2 月から 5 月にかけて矢川駅までの道路（300m）を 12m に拡幅し、歩道をつける工事がなされています[33]。

写真 26 には拡幅工事がまだ始まったばかりの頃の様子が、写真 27 では工事が完成に近づいた状況が収められています。

いずれも甲州街道側（南側）から南武線方向（北側）に向かって撮影されたものです。写真 27 では、

31　現在の矢川通りは、以前は「地蔵街道（海道）」といいました（「矢川道路」とも称したようです）。「矢川通り」の名称は、1982 年に市制施行 15 周年を記念して行われた市道の愛称募集で決められました。なお、市道の愛称を募集した時点では、区間を「南武線矢川駅踏切から郵政研修所正門前交差点まで」（『市報くにたち』№.388）としていますが、愛称が決定した区間は「甲州街道矢川駅入口交差点から郵政研修所正門前交差点まで」（『市報くにたち』№.394）と変更されています。「甲州街道矢川駅入口交差点から南武線矢川駅踏切まで」の区間を延長して、「矢川通り」の愛称として決定したようです。

32　国立町史編纂会によって、1962 年 7 月 1 日に初版が発行されています。

33　『広報くにたち』№.108（1962 年 7 月 1 日）3 面「矢川道路拡幅舗装工事」。なお、同記事では、工事着工を同年 2 月 5 日、竣工を 5 月 25 日としていますが、『広報くにたち』№.115（1963 年 1 月 1 日）「昭和 37 年の主なできごと」5 面の掲載写真の説明では、工事着手を 2 月 6 日、完成を 5 月 10 日として報じています。

（上）写真 25. ﾌｧｲﾙNo. 017_173_28
（中）写真 26. ﾌｧｲﾙNo. 017_173_17
（下）写真 27. ﾌｧｲﾙNo. 019_197_28

資料 14 の平面略図で「第四種踏切」と示されている南武線の踏切が奥に確認できます。この踏切の手前を左手に入ると写真 22 ～ 24 のように矢川駅の駅舎があるのですが、通りから引っ込んだ位置にあるため、写真 26・27 には写っていません。この道路拡幅工事を収めたとみられる写真が他にもありますが、矢川駅舎が写っているものは、残念ながら確認できません。

前段で資料 4 として紹介した 1959（昭和 34）年 3 月 10 日付の『朝日新聞』の記事。そこには矢川駅の地元の久保地区青年団が、1 月に 22 本の番傘を駅へ設置したことが報じられていました。原田重久氏が「まごころガサ」と名づけたこの貸出用の傘は、矢川駅舎の事務所内で板壁に吊るされていたよ

資料 4 の掲載写真

うです。写真 22 ～ 24 が撮影された 1962(昭和 37) 年当時は、「まごころガサ」の設置後 3 年ほどが経過しています。傘がどの程度残っていたのか定かではありませんが、国立駅では設置して 1 年足らずでほぼ傘がなくなってしまったと言われていることから、矢川駅の「まごころガサ」も既に残されていなかったのかもしれません。

それを裏付けるかのように、前段の資料 2 で紹介した 1962 年 7 月 22 日付の『毎日新聞』の記事には、同年の 7 月中旬頃に寄附された傘 200 本のうち、40 本が矢川駅に備え付けられたことが報じられています。この 40 本の傘が駅のどこに置かれていたのかは分かっていません。写真 22 ～ 24 では傘が確認できませんので、「まごころガサ」同様に駅舎事務所内に置かれていたのか、あるいは写真 22 ～ 24 が傘の設置前に撮影されたのか、いずれかと考えられます。

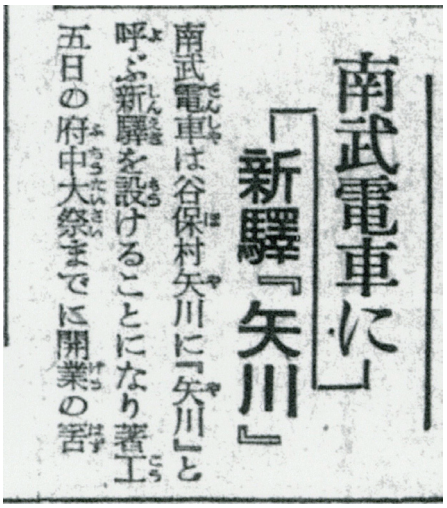
b. 矢川駅開業時、駅舎はなかった？

矢川駅に関しては、先に紹介した『概史 抜萃』の「矢川駅の沿革」の記述が注目されます。

この記述によると、矢川駅の本屋（駅舎）の建築は 1947（昭和 22）年であったことになります。そ

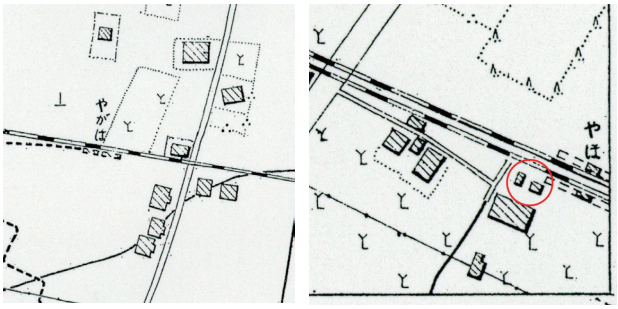
して本屋が建築された時点で駅員が配置されていることも分かります。

矢川駅は、1932（昭和 7）年 5 月 3 日に「矢川停留場[34]」の新設届が提出され[35]、同月 20 日に開業しています。その開設については、当時の新聞（同年 4 月 26 日付『東京日日新聞』府下版：資料 15）で、いち早く報じられています。


南武電車に
「新驛『矢川』」
南武電車は谷保村矢川に「矢川」と
呼ぶ新驛を設けることになり著工
五日の府中大祭までに開業の筈

資料 15.『東京日日新聞』府下版 1932 年 4 月 26 日　12 面
資料提供：国立国会図書館

ここでちょっとした疑問が湧きませんでしょうか。矢川駅が停留場として開設されたのが 1932 年。本屋が建築されたのが 1947（昭和 22）年。この間、矢川駅に駅舎はなかったということでしょうか。確かに、聞取り資料には「はじめは踏み台のような段段があって、電車はただ止っただけでした」[36] という回想があり、ホームだけがあったような印象を受けます[37]。ただし、駅舎がなかったとはっきり語られているものが見当たりません。そこで地図をあたってみることにしました。



資料 16. 出典：国土地理院発行 3 千分 1『谷保』（右は一部加工）

資料 16 はいずれも「昭和十八年二月空中写真測量」とある同じ地図から、矢川駅（左）と谷保駅（右）附近を切り抜いたものです。谷保駅にはホームらしき表示の近くに駅舎とみられる建物が描かれています（赤丸の部分）。それに対して矢川駅では、通りから奥まった位置にホームが設けられている様子がうかがわれますが、谷保駅のような駅舎とみられる建物がありません。なお、ホームがより東側まで延び、駅舎とみられる建物が描かれた 1959（昭和 34）年の地図[38] が存在しており、そこには資料 14 の矢川駅平面略図にある駅舎の配置と同様の状況が示されています。

さらに国土地理院が提供している地図・空中写真閲覧サービスによる空中写真で矢川駅附近をクローズアップしたのが資料 17 です[39]。

資料 17. 国土地理院 地図・空中写真閲覧サービスより（右は一部加工）

左は本屋建築前の 1941（昭和 16）年 7 月 4 日に撮影されたもの、右は本屋が建築されて 1 週間程の 1947 年 8 月 8 日に撮影されたものです。いずれも写真の上下に通じている道が現在の矢川通りで、中央の辺りを左右に走っているのが南武線の線路になります。右の写真には資料 14 の平面略図にある本屋と便所とみられる建物が写されています（赤丸の部分）。それに対して左の写真では、不鮮明で充分には確認できませんが、駅舎に相当するような建物はなさそうです。

これらの資料から判断して、1932 年の矢川駅開設後、1947 年に本屋が建築されるまでの 15 年ほどの間、矢川駅に駅舎はなかった、現在の調査段階では、そのように考えられます。

34　『鉄道辞典』下巻（日本国有鉄道、1958 年）では、「停留場」について「地方鉄道においては、列車を停止して旅客の乗降・貨物の積卸しを行う場所で、転轍器（てんてつ器）の設備のないものを停留場という」としています。
35　南武鉄道株式会社 第 23 回報告書（昭和 7 年上期：自昭和 7 年 4 月 1 日 至昭和 7 年 9 月 30 日）1 頁
36　『国立の生活誌　古老の語る谷保の暮らし』（国立市教育委員会／国立市民具調査団、1983 年）174 頁「佐伯イヨさん」
37　前掲註 36 の 38 頁では、土木建築請負業を営んでいた佐伯ナツ氏が「南武線の工事、前の駅（矢川駅）のホームなんかもうちでやったんです。立川の駅から分倍河原、矢向までうちの区域でした」と語っています。
38　『国立地区現形図』（縮尺 3000 分の 1　1959 年 8 月　株式会社測地文化社作成）
39　地図・空中写真閲覧サービス　https://mapps.gsi.go.jp/　資料 17 の左：C25-C4-148　右：USA-M389-124

当館では、『歩いて 集めて 見て 聞いて ―消えゆく暮らしを記録せよ―』と題した秋季企画展を開催しています（会期：10/8（土）～ 11/23（水・祝））。その企画展を担当した安齋主任学芸員が、展示準備で聞取り調査を行っていましたが、そこから矢川駅に関する情報が提供されました。

矢川駅近隣の久保地域に生まれ、お住いになっている佐伯有行氏（1932・昭和 7 年生）からの聞取りによると、開設後しばらく、矢川駅に駅舎はなかったとのことでした。その当時はホームに直接入って、切符は車両の中で購入していたそうです。

従前の聞取り資料でも、南武鉄道株式会社（以下、南武鉄道）の社員であった松本清氏が、「停留所について、面白いことには、どこの停留所にも同一に『電車にお乗りの方は、お手を上げて下さい』という看板が、掛けてありました。手を上げなければ、運転手はよくみながら、『ポッーポッー』と合図を鳴らしながら、停車せずに行ってしまうわけです」と語っています[40]。駅舎がなく、駅員もいなかった矢川停留場では、利用者は直接ホームに入って、行先の電車に手を上げて乗車し、車内で切符を購入して目的地に向かうという、今から考えるととてものどかな光景が展開していたようです。

c.1947 年建築の駅舎はいつまであった？

1947（昭和 22）年に建築された矢川駅の駅舎が、いつまで存続していたのか正確なところは掴めていません。写真 22 ～ 24 が遺されていることから、1962（昭和 37）年においては現役の駅舎として使用されていたことが確認できます。

南武線では、1966（昭和 41）年 3 月 25 日から西国立駅～谷保駅の間で複線運転が開始されています。この複線運転開始を紹介した新聞記事では、「沿線の同町〔国立町：引用者〕富士見台に住宅公団・富士見台団地（二千六百戸）が完成していらいの通勤、通学者の殺人的な混雑も解消される」と報じており[41]、先ほど紹介したようなのどかな乗車風景とは対照的な光景が、この時期には展開していたようです[42]。

複線化工事にあたって、矢川駅ではホームの南側に下り線の線路を増設しています。

写真 29 は矢川駅ホームから東側（谷保駅方向）に向けて、写真 30 は現在の矢川通り側から西側（西国立駅方向）に向けて、いずれも 1965（昭和 40）年頃に複線化工事の様子を収めた写真です。元来はホーム南側に隣接するように駅舎があったはずですが、この時点では既になくなっていることが確認できます。複線化工事で線路増設用地とするため、駅舎が元の場所から撤去されていたとみられます。

写真 28. 谷保駅―矢川駅間複線化工事：ﾌｧｲﾙNo. 035_343_03

（上）写真 29. ﾌｧｲﾙNo. 033_324_23
（下）写真 30. ﾌｧｲﾙNo. 033_324_24

40　前掲註 36 の 262 ～ 263 頁「松本清さん」

41　『サンケイ新聞』東京版 多摩（1966 年 3 月 17 日）掲載面不明「25 日から待望の複線運転 南武線西国立―谷保間 ダイヤも数分短縮 殺人的ラッシュ解消へ」

42　1962 年刊行の『谷保から国立へ』（前掲註 32）では、「この駅〔矢川駅：引用者〕も最近は乗降客が日ましに増えて、ラッシュアワーなどは一人の駅員がてんてこ舞をしている」と述べており、富士見台団地完成（1965 年 8 月 1 日入居希望者募集開始、同年 11 月 1 日完成・入居開始）以前から矢川駅の乗降客が増加していたことがうかがわれます。

当館所蔵の写真資料にはありませんが、個人撮影として書籍に掲載されている 1965（昭和 40）年の矢川駅の写真に、複線化工事が進められていた時の駅舎を確認できるものがあります[43]。

その写真では、ホーム南側に複線化のための用地が確保されている様子がうかがえますが、さらに大きな変化として、駅舎が現在の矢川通りに沿って建っているのが確認できます。1962（昭和 37）年撮影の写真では、通りから奥まった位置に駅舎がありましたので、複線化工事に伴って位置が変更された可能性が考えられます。この通り沿いに建つ駅舎は、少々改変されていますが、1962 年当時と同じ建物ではないかとみられます。

写真 29 を加工：印のある平屋建てが移築された駅舎とみられる建物

写真資料からの推察ではありますが、ホーム南側にあった駅舎は、複線化の用地にあてるため、従来建っていた場所から通り沿いへと移築されたのではないでしょうか。その通り沿いに移築された駅舎も、1965（昭和 40）年 12 月 25 日に橋上駅となった矢川駅の改築工事完成[44]によって役目を終えたとみられます。

ちなみに、この橋上駅化された新たな矢川駅舎（写真 31）は、南武線として初の橋上駅舎であるとして当時報じられています[45]。

写真 31. 橋上駅となった矢川駅（1966 年頃）
：ﾌｧｲﾙ№. 039_386_22.

d. 矢川駅の名前の由来

村の名称をそのまま駅名としたものが多い当時の南武鉄道にあって、矢川駅では所在地の名が用いられていない点が指摘されています[46]。

矢川駅附近は、当時、大字を「石田」、小字を「鶉久保」と言った場所だったようです[47]。当時の村内の字名を確認してみましたが、「矢川」というものは存在しませんでした。これらの点からして、やはり地名から名付けられた駅名ではなさそうです。

資料 4 で紹介した「まごころガサ」の命名者であった原田重久氏は、国立市や多摩地域の郷土史についても造詣が深く、郷土に関する多くの著述を遺されています。その中で矢川駅の名称決定について、「当時の村長だった佐伯茂作氏、南養寺住職佐伯貴一氏その他二、三の有志の合議の結果『矢川』と名付け鉄道側へ申請したのである」[48]とされており、近隣を流れる「矢川」（「谷川」「野川」とも表記）を由来とした名称が地元から申請され、採用されたことが述べられています。

聞取り資料によると、駅開設にあたっては、地元で寄付を集めて駅のための土地を購入するなどの働きかけがなされていたようです[49]。地元の請願によって設置されたため、その名称も地元の申請に基づき矢川駅（当時は矢川停留場）とされたのかもしれません。

43　生田誠『南武線・鶴見線　街と駅の 1 世紀』（株式会社アルファベータブックス、2015）62 頁に「撮影：萩原二郎」として掲載の写真。なお、同じ写真は、山田亮『南武線、鶴見線　青梅線、五日市線　1950~1980 年代の記録』（株式会社アルファベータブックス、2017 年）42 頁にも掲載されています。

44　『広報くにたち』№. 160（1966 年 1 月 1 日）5 面

45　『毎日新聞』東京版 多摩（1966 年 10 月 12 日）16 面「駅 南武線 矢川駅」

46　『南武鉄道　いま　むかし』（多摩川新聞社、1999 年）で原田勝正氏は、「この駅〔矢川駅：引用者〕の所在地は国立市谷保石田である。駅名はしかし石田を採っていない。これも興味をひかれるところで、いろいろ調べてみると、国立市内の南西部を流れている矢川によるものという」（47 頁）と述べられています。

47　原田重久『国立歳時記』（逃水亭書屋、1969 年）116 頁。なお、1929 年の分倍河原・立川間の南武鉄道開通に関わる資料には、鉄道が敷設される谷保村内の字名を列記した中に「鶉久保」の表記がみられます。

48　原田重久『国立風土記』（逃水亭書屋、1967 年）61 頁「南武線の二駅」

49　前掲註 36 の 174 頁「佐伯イヨさん」

なお、聞取り資料では次のように述べているものがあります。

「矢川駅ね。矢川って川はあるけど、矢川という地名はないんだ。あそこはハラザンヤと言ってたんだ昔から。今は矢川と言ってるけど。南武線が引けて、あそこに駅が出来た。色々問題があって、矢川となった」[50]

どのような問題があったのかは詳らかではありませんが、地元からの名称申請にあたっても、何かしらの障害があったことをうかがわしめる証言です。

矢川駅の駅名決定の経緯は、現状では殆ど分かっていません。今後の更なる調査が必要なのです[51]。

2-2-2 南武線 谷保駅

a.1962 年頃とその後の谷保駅

『概史 抜萃』では、谷保駅について「谷保駅の沿革」という項目を設けています。ところが、どういう訳か、ここでは歴史的事項に関しての記述がなされていません。「昭和 19 年 4 月以降省線として営業されるようになつてから〔国有化後のこと：引用者〕は急激に駅周辺に人家並びに工場が増設され、国立町が文教地区に指定されてからは駅勢も大いに向上して貨物関係の将来性も確約されて居ります」とあり、この部分からは駅周辺の開発が進んだことが推し量れますが、駅自体の変遷については残念ながら語られていません。

それでも、紹介した 1962（昭和 37）年撮影の個人所蔵写真には、当時の谷保駅舎が収められたものが 3 点確認できます。

（上）写真 32・（下：前掲）写真 21. 改築以前の南武線 谷保駅
個人所蔵

写真 33. 改築以前の南武線 谷保駅：個人所蔵

その内の 2 点が、写真 32 と前掲の写真 21 です。当時の谷保駅舎が線路の南側にあったことからすると、いずれも矢川駅側から谷保駅を撮影していることが分かります。

写真では上下線 2 本の線路があり、既に複線化が進んでいるようにみえますが、谷保駅から西国立駅までの複線化工事が完成・開通するのは 1966（昭和 41 年）3 月 25 日のことです。この撮影時点ではまだ複線化は完成していません。

実は 2 本ある線路の内、右側に見えている線路は撮影地点よりもさらに矢川駅側で行き止まりになっていたそうです。奥側の立川へ向かう電車は先にあるポイントで切り替え、左側の線路を進んだとのことです[52]。

3 点中残る 1 点が写真 33 です。1962 年当時の谷保駅舎が間近で撮影されている貴重な 1 枚です。

前記のとおり、橋上駅化される前の矢川駅と谷保駅を撮影した写真は、管見の限り、いずれも数枚程度しか確認できていません。どういう訳か、当時の町の広報担当が撮影する機会もなかったようで、当

50　前掲註 36 の 252 頁「佐伯又兵衛さん」

51　前掲註 36 の 189 頁で、佐伯徳次郎氏は、「矢川って駅名は、やっぱり川の名前を自然と付けたようですね、今でもムラザンヤと言うけれど知らない人が多いいもんね。矢川道、矢川道って言ってたからね」と語っています。現在の矢川通りは、川の名前から「矢川道」とも称されていたようで、駅名も同様に名づけられたとされています。

52　『市報くにたち』№.411（1983 年 9 月 5 日）3 面「写真は語る くにたち今昔 ～南武線谷保駅～」

館に移管されている役所の広報担当が撮影した写真には、ほぼ皆無といった状況です。町勢要覧等の刊行に際して、町内の公共施設や学校、交通機関等をまとめて撮影して回ったと推察される写真がありますから、南武線の駅が撮影されていてもおかしくないのですが、未だに殆ど確認できていません。

町報等の掲載写真には、当館に移管された資料にはないものが数多くありますので、撮影されていても何かしらの事情で保存され得なかった写真がかなりあるのは事実です。そういった失われた写真の中に含まれていたのかもしれません。それでも、橋上駅化される前の谷保駅舎の写真が、1 点だけ移管された中に存在しています。それが写真 34 です。

写真 34. 改築以前の南武線 谷保駅：ﾌｧｲﾙNo.なし

写真 34 は、残念ながらその撮影時期が明らかではありません。ただし、1967（昭和 42）年 1 月 23 日に国立市役所が発行した『国立市勢概要』の 19 頁にこの写真が掲載されていますから、それ以前に撮影されたことは間違いありません。

また、写真 33 と比較すると、駅名表示板と改札が明らかに変わっています。駅舎自体についても、腰板部分や屋根の破風と妻面の部分をきれいに仕上げ直してある点が確認できます。

これらの点を踏まえると、写真 33 が撮影された 1962（昭和 37）年よりも後に写真 34 は撮影されたものと考えてよいでしょう。

ちょうど 1966（昭和 41）年に谷保駅～西国立駅間の複線化工事が完成・開通している点を考え併せると、その開通に向けて駅舎等の改修がなされ、その状況を収めた写真ではないかとも推察されます。

まだまだ他の資料を調査・検討しなければ確定するには至りませんが、写真 34 の撮影年代は、現状では 1966 年前後ではないかと考えています [53]

b. 谷保駅に設置された貸出用の傘

写真 34 を確認していて、とても面白いものが写り込んでいることに気づきました。お分かりになりますでしょうか。改札の手前左側をご覧ください。何と、ここに傘が数本掛けられているのが記録されているのです。

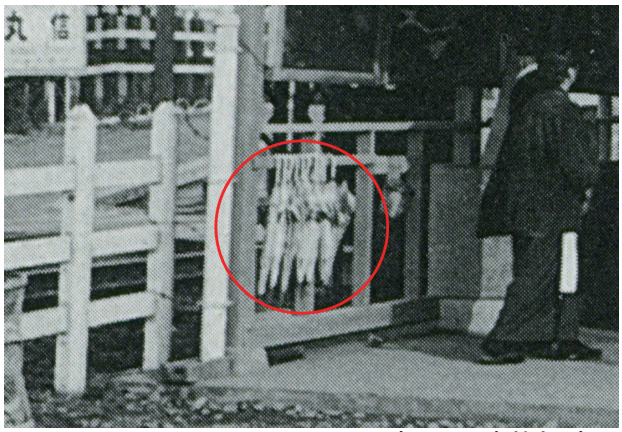


写真 34 の一部拡大・加工

そうです。昭和 30 年代半ばころから、国立町で寄附により各駅に設置されていた貸出用の傘、その傘が写されたと考えられるのです。

町報や新聞報道等からして、直接谷保駅に傘が寄附され、設置されたという事例は確認できません。前段の資料 2 の新聞報道によると、1962 年 7 月中旬頃に寄附された 200 本の傘の内、40 本が谷保駅に設置されたことが報じられています。

写真 33 は新聞報道のあった 1962 年に撮影されたものですが、この写真に傘は写り込んでいません。傘が寄附・設置される前に撮影されたのか、写真 34 とは別の場所へ当初は設置していたのかは分かりません。写真 33 が寄附後の撮影であったとしても、寄附されてまだ間もない傘を、写真 34 のように無造作に改札前に掛け置くというのも忍びない、そのようなことで別に設置されていたのかもしれません [54]。

1962 年に設置された貸出用の傘について、その後 1964（昭和 39）年に資料 3 で取り上げられています。この点は前段で既に確認していますが、寄附

53　前掲註 43 の書籍には、1965 年の谷保駅舎の写真がいずれも掲載されており、写真 34 と同じく、駅舎改修の様子が確認できます。この点からして、1965 年には既に改修がなされていたことになりますが、これがいつなされたのかは分かっていません。ちなみに『多摩のあゆみ』第 129 号（たましん地域文化財団、2008 年）に所収の鈴木文彦氏による「国立・立川周辺の駅と駅前ロータリー」には 1970 年頃の谷保駅舎の写真が掲載されており、これも写真 34 と同じく改修後の駅舎となっています。

54　資料 2 の報道では同じ時に矢川駅にも 40 本の傘が設置されますが、前記のとおり、写真 22 ～ 24 にも傘を確認できません。

された200本の傘のうち、国立駅・谷保駅・矢川駅の3駅を合わせても38本（内、国立駅は5本）しか残っていないと報じられています。資料3では谷保駅・矢川駅に当初設置された傘の数を50本としており、そこが資料2の40本と相違していますが、いずれにしても谷保駅・矢川駅では合わせて33本が何とか残っていたようです。それでも半分以上が既に失われています[55]。

資料3では、国立駅は傘が残り5本であるため、貸出しを中止することになったと報じていますが、谷保駅と矢川駅も一緒に中止したのかまでは記されていません。ただ、前掲註6で示したように、1965（昭和40）年2月1日付の『広報くにたち』№.148の記事（資料5）では、「37年に黄色い雨ガサ200本を寄付し3つの駅と交番に置かれましたが、現在では大部分がなくなっています」と記しています。この記述から、1965年でも傘の貸出しがまだ継続されていたのではないかと考えられます[56]。ただ「大部分がなくなってい」たということは、資料3の状況よりも残された傘の本数はさらに少なくなっていたと考えてよいでしょう。

写真34で改札前に掛けられている傘は6本程度で、傘自体は幾分小振りのようです。資料3に拠れば、1962（昭和37）年に寄附された200本の傘は「黄色い小型のもの」とされています。写真34に写る傘は小振りという点では類似していますが、モノクロ写真のため色までは確認できません。

資料2の掲載写真に収められている傘と、写真34に写る傘が同タイプの傘であると確定できれば、その関連性がより明らかになるのですが、新聞に掲載されたものであるため資料2の写真は鮮明でなく、確定するまでには至りません。

資料2の掲載写真：国立駅における貸出用の傘

資料の制約に阻まれて確定できずに歯がゆいですが、写真34に写し撮られた傘は、1962年に寄附されて谷保駅に配置された貸出用の傘で、辛くも残された数本の傘だったのではないか、個人的にはそう考えています。確定するには更なる資料の出現を俟たねばなりませんが、そのような資料や情報がみつかり、又お寄せいただけることを願うばかりです。

c.1948年の谷保駅の本屋建築：その前

前記のように、『概史 抜萃』の「谷保駅の沿革」では、詳細な駅の歴史が語られていません。しかし、「駅史概要」とされた年表部分には気になる記述がみられます。それは、「昭和23年3月26日　谷保本屋竣工」という記述です。この「3月26日」の部分は元々の月日を上から手書きで改訂してあるようです。

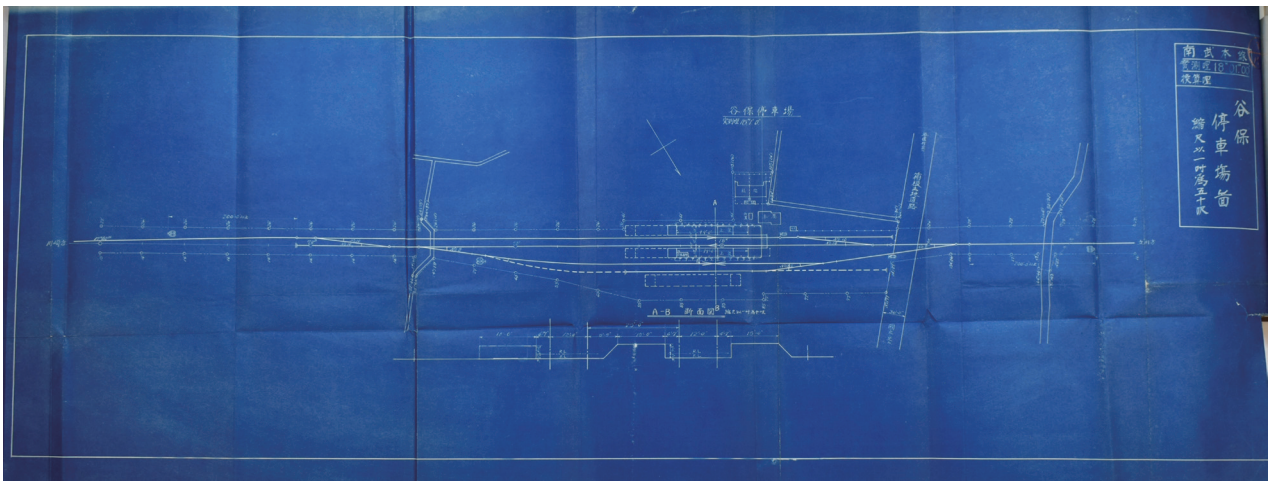
矢川駅については、「矢川駅の沿革」の項目で、「昭和22年7月31日に本屋並びに便所等を新築し同年8月6日から駅員を配置して営業を開始いたしました」と記述があり、「駅史概要」にも「昭和22年7月31日　矢川駅本屋並びに便所竣工」「昭和22年8月6日　矢川駅に駅員を配置して手小荷物を除く旅客営業を開始」と記述されています。

これが谷保駅の場合だと「谷保駅の沿革」には情報の記載がなく、「駅史概要」にだけ本屋竣工が記載されているのです。矢川駅では1947（昭和22）年の建築まで本屋（駅舎）がなかったと考えられる点を示しましたが、そうなると谷保駅の場合、1948（昭和23）年の本屋竣工より前はどうだったのでしょうか。

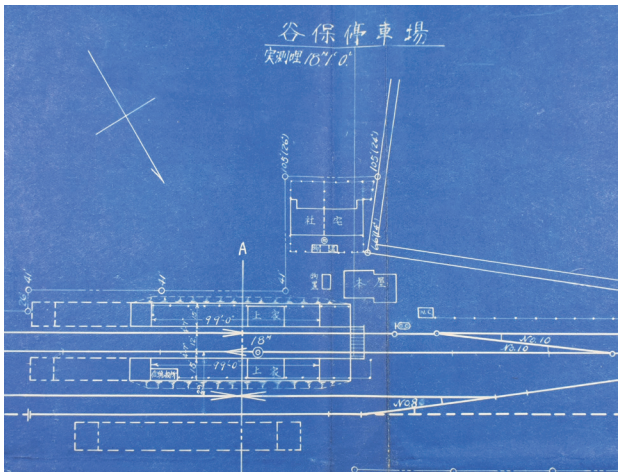
南武鉄道は、1929（昭和4）年12月11日に立川まで路線を延伸し、分倍河原～立川間の運輸営業を開始しています。谷保駅は、この開通に際して営業を開始した駅のひとつです。当時の新聞報道では、「立川―府中間の停留所は久しく選定中であつたが廿四日〔1929年10月24日：引用者〕左の四箇所

55　資料1として掲載した『広報くにたち』№.144（1964年11月1日）の「町長メモ」において、当時の田島町長は「先日調べたところでは」として、「谷保駅が40本で未回収が11本」と述べています。いつ調べたものなのかはっきりしませんが、この調査段階では谷保駅に29本の傘が残されていたことが示されています。

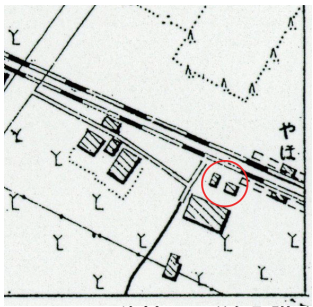
56　『広報くにたち』№.148の記事では、1965年の1月に更に傘の寄附があったことが述べられています。資料3で中止すると報じられていた国立駅も含め、設置の傘が増えたことで貸出しが継続されていた可能性もありそうです。



資料 18. 谷保停車場図　　資料提供：東京都公文書館



資料 18 の部分拡大



資料 16 の谷保駅附近

と決定した」として、東立川・西国立・谷保・西府の 4 つを挙げています[57]

南武鉄道が 1928（昭和 3 年）2 月 15 日に鉄道大臣へ提出した府中立川間工事施工認可の申請書には、停車場の図面が添付されており、その中に「谷保停車場図」(資料 18)[58] が含まれています。申請書記載の図面目録では、この図を「谷保停車場設計図」としていますので、谷保駅に当初想定された設備が記されているものと考えられます。

この設計図からは、本屋の他に便所・物置、さらには井戸や物置を備えた社宅といった設備が予定されていたことが確認できます[59]。

これらの設備が設計図どおりに建築されたのかどうかはっきりしませんが、前掲の資料 16（「昭和十八年二月空中写真測量」とある地図）において赤丸をつけた 2 棟の建物は、谷保駅に関係する設備とみられます。丸印の下にある建物は、設計図で社宅とされているものと同じ位置に建っています。谷保駅開設時に予定された本屋等の諸設備は、1948（昭和 23）年の本屋竣工前においても何かしら設けられていたようです。

なお、『概史 抜萃』では西国立駅について、1950（昭和 25）年 4 月 20 日に本屋が竣工し、同 25 日から新本屋で営業を開始したと記されています。新本屋竣工に伴い「出改札扱小屋」は倉庫に転用されたようですが、そもそもこの小屋は、「昭和 19 年 12 月 20 日に下り乗降場の川崎方下に 6 尺に 12 尺の小屋を新築して出改札、手小荷物扱所とした」ものであったと述べています。

谷保駅も西国立駅と同様の状況にあったとすれば、1948（昭和 23）年 3 月 26 日の「谷保本屋竣工」とは、従前あった出改札を扱う小屋的な建物を廃して、新本屋を建築したことを述べているのかもしれません。

いずれにしても、1947（昭和 22）年に本屋が建

57 『東京日日新聞』府下版（1929 年 10 月 26 日）12 面「新駅四つ南武鉄道挿 府中立川を繋ぐ延長線 十一月末から便利になる沿線」

58 国立市が所蔵する本田家旧蔵資料には、資料 18 とほぼ同じ青焼き図面（南武本線谷保停車場図（青写真））が確認されますが、資料 18 とは表記されている数字の一部が相違しています。

59 認可申請の書類では、谷保駅に関する「停車場費」として、8,000 円が計上されています。停車場費は、他に「東立川駅」分として 33,650 円が、「将来新設見込」の「停留場」3 箇所分として 3,000 円が計上されています。なお、ここで「東立川駅」とされているのは、西国立駅として開設された駅と考えられます。

築されるまで駅舎のなかった矢川駅とは異なり、谷保駅には営業開始の時点で何かしらの設備が備わっていたと考えています。それが資料 18 で設計されていたような停車場の設備であったのか、もっと簡易な設備しか設置されなかったのか、現時点では分かりません。

d.1948 年の谷保駅本屋建築：その後

『概史 抜萃』に拠れば、1948（昭和 23）年に竣工した谷保駅の本屋は、その後 1952（昭和 27）年に、矢川駅の本屋と共に改築がなされています[60]。

『概史 抜萃』は 1955（昭和 30）年 5 月 10 日に出ているため、それ以降の昭和 30 年代に、両駅の本屋に何がしかの変更がなされている可能性は皆無ではありません。しかし現段階では、1962（昭和 37）年に撮影された写真 33 の谷保駅の駅舎は、1948 年に竣工した本屋であろうと考えています。同じく写真 24 の矢川駅の駅舎も、1947（昭和 22）年に竣工した本屋とみて大過ないでしょう。

両駅の開設は、谷保駅が 1929（昭和 4）年、矢川駅が停留場として 1932（昭和 7）年でした。これを頭に置いて写真 33 と写真 24 をみると、写真 33 の駅舎が、写真 24 よりも古い建物と考えてしまいそうです。しかし『概史 抜萃』に拠ると、写真 24 の駅舎の方が半年程前に建てられたものです。

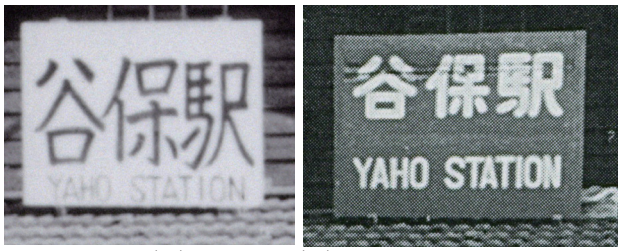
いずれも似たような駅舎であるのは、建築年代にあまり差がないことが関係しているのかもしれません。この点は 1950（昭和 25）年に竣工した西国立駅の本屋とも比較したいのですが、残念ながら当時の西国立駅舎が収められた写真がまだ確定できておらず、今後の課題です[61]。

写真 33 の谷保駅舎は、写真 34 に記録されているように改修を加えられながらも、1979（昭和 54）年に橋上駅となるまで使用されたようです[62]。

e. 谷保駅の呼び方

谷保駅についてちょっとしたエピソードが語られているのですが、写真 33 と写真 34 でちょうど確認ができるので紹介しましょう。

写真 33 と写真 34 の駅名表示看板を確認してください。「谷保駅」の下の「谷保」の英語表記が「YAHO」となっているのが分かります。



（左）写真 33・（右）写真 34 の駅名表示看板部分

今の谷保駅の表示も同様の表記ですから、現在からみれば何ら違和感のないところかもしれません。

しかし、現在でも「谷保」について異なる表記が存在しています。それは谷保駅から谷保天満宮へ向かう甲州街道にある信号機の表記。こちらの「谷保」の英語表記は「YABO」となっています。余談ですが、この場所は、国立市内で最初に信号機が設置された信号機第 1 号の記念すべきところです[63]。

写真 33 の谷保駅舎

写真 24 の矢川駅舎

60 「駅史概要」に「昭和 27 年 9 月 8 日　谷保駅、矢川駅本屋改築並びに土間（コンクリート）工事完了」とあります。

61 前掲註 43 で紹介した書籍では、1965 年と 1967 年の西国立駅舎の写真がそれぞれ掲載されていますが、この駅舎が 1950 年建築の駅舎と同じものかどうかまだ調査中です。

62 『市報くにたち』№.350（1979 年 4 月 5 日）5 面「新しく橋上駅に 谷保駅」では、橋上駅の完成予定を 11 月初旬と報じています。「ホームの屋根やベンチなどもとりはらわれ、ちょっぴりみすぼらしく目にうつりますが…」と改良工事の様子を伝えており、この時点で駅舎がどうなっていたのか気になりますが、写真などでは確認できません。

63 『広報くにたち』№.138（1964 年 5 月 1 日）1 面「信号を守ろう」、同№.146（1965 年 1 月 1 日）2 面「昭和 39 年のおもなできごと」では、1964 年 4 月 8 日に谷保天満宮前の三叉路へ、初めての信号機が設置されたことを、いずれも写真掲載で紹介しています。

参考資料：谷保駅と同駅の駅名表示（2020 年 10 月撮影）

参考資料：谷保天満宮前信号機とその表記（2020 年 10 月撮影）

この「谷保」の読み方について、原田重久氏は次のように述べています。

「谷保は『ヤホ』とも言うし『ヤボ』とも言われる。日本をニッポンと呼びニホンとも称しているように、何れが正しい、とは一概に断定し難い。だが、一般的に、ヤボと濁音で呼ばれてきていたことは事実である」[64]

この言からすれば、「谷保」の呼称は、以前は濁点の付いた「ヤボ」が一般的であったようです。では、谷保駅はどうして「YAHO」という表記になっているのでしょうか。この点についても原田氏が次のように語っています。

「『谷保駅』の名称はもとの村名からとったものなので、『やぼ』と読むのが正しい。現在の駅標示がYAHO となっているのは、語韻の感じがよくないということで、濁音をとって、『やほ』と書き換えたのである。」[65]

そして更に次のような興味深いエピソードも紹介されています。

「南武線谷保駅の標示は『やほ』となっているけれども、駅を利用する若い人たちなどから『やぼ』と言って切符を買うのにかっこ悪い、というような苦情が出て、時の村長（西野寛司氏）が独断で『やほ』と改めさせたのである。それまでは、駅の標示もYABOと書かれていた」[66]

この証言に拠れば、西野寛司氏が村長であった時期に呼称の変更があったことになります。西野氏は、1925（大正 14）年 3 月 16 日の村会で村長に選ばれ、1930（昭和 5）年 9 月 15 日までその任にあたっています。谷保駅の開設が 1929（昭和 4）年 12 月 11 日であることを考え併せると、開設まもない段階で駅の呼び方が変更されたことになります。

この点を確かめるべく資料を探しているのですが、立証できる資料がなかなかみつかりません。

『停車場変遷大事典』を確認してみても、「谷保駅」の仮名駅名は開設当初から「やほ」であったとされており、変更があったような表記はみられません[67]。

南武鉄道の分倍河原～立川間の運輸営業開始に関して、1929（昭和 4）年 12 月 18 日付の『官報』第 892 号（512 頁）で報告されていますが、そこでは

64　前記註 48 の 16 頁。なお、「一部にはヤブと呼称する向もあるが、これはヤボのなまりであろう」とも述べています。明治初期の日記や記録の類で、「谷保」を「藪」や「ヤブ」と表記したものがあり、これらを踏まえての解釈とみられます。

65　原田重久『わが町国立』（逃水亭書屋、1975 年）73 頁

66　『市報くにたち』№.257（1973 年 4 月 5 日）2 面　原田重久「わが町国立」谷保の名の由来（一）

67　『停車場変遷大事典』国鉄・JR 編 II（JTB、1998 年）68 頁

「谷保」に仮名が振ってあります。しかし残念ながら、この振り仮名が「やほ」であるのか「やぼ」なのかはっきり読み取れません[68]。前記の『停車場変遷大事典』では「やほ」と読んでおり、濁点は付いていないのかもしれませんが、略されている可能性がないともいえません[69]。

1944（昭和 19）年 4 月 1 日より、南武鉄道等所属の鉄道が国有化されますが、その際になされた官報の告示[70]においても、停車場名に仮名を振ったものがみられます。

ここでは「谷保」には「やほ」と仮名を振っており、「矢川」には「やがは」、「分倍河原」には「ぶばいがはら」と濁点の仮名も振られていることが確認できます。この点からすれば、1944 年の南武鉄道の国有化時には、谷保駅の「谷保」は「やほ」と読まれていたようです。

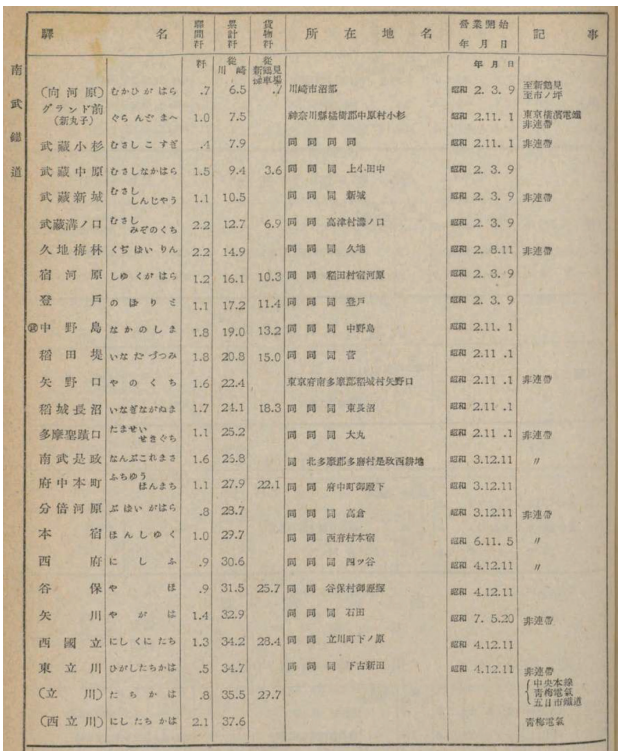
さらに、1934（昭和 9）年 12 月 15 日現在とされた、当時の鉄道省による『鉄道停車場一覧』（資料 19）[71]をみると、南武鉄道の駅名として「谷保」を「やほ」と表記しています。「矢川」を「やがは」と表記するなど、他では濁点の表記がみられることから、この段階でも「やほ」と呼ばれた駅であった可能性が高いと考えられます。

これらの点を踏まえて、さらに地図で確認ができないかと探ってみました。地図には駅名を平仮名で表示しているものがあるからです。

ところが、こちらも想定したような色良い結果を得ることはできませんでした。地図では「やほ」と「やぼ」が混在していて、年代差としての検出ができないのです。

当館の資料研究室やくにたち中央図書館が所蔵する地図をざっと確認しただけですが、1940（昭和 15）年 6 月測図と印字のある地図では「やぼ」、前掲の資料 16 として紹介した 1943（昭和 18）年 2 月測量の地図では「やほ」となっています。

ではこの昭和 10 年代に濁点がとれたのかというと、さにあらずなのです。



南武鉄道	驛名		哩間粁	哩計粁	貨物粁	所在地名	營業開始年月日	記事
			粁	從川崎	從鶴見 新城 車場		年月日	
	(向河原)	むかひがはら	.7	6.5	.7	川崎市沼部	昭和 2. 3. 9	至新鶴見 至市ノ坪
	グランド前 (新丸子)	ぐらんどまへ	1.0	7.5		神奈川縣橘樹郡中原村小杉	昭和 2.11. 1	東京横濱電鐵 非連帶
	武蔵小杉	むさしこすぎ	.4	7.9		同 同 同 同	昭和 2.11. 1	非連帶
	武蔵中原	むさしなかはら	1.5	9.4	3.6	同 同 同 上小田中	昭和 2. 3. 9	
	武蔵新城	むさししんじやう	1.1	10.5		同 同 同 新城	昭和 2. 3. 9	非連帶
	武蔵溝ノ口	むさしみぞのくち	2.2	12.7	6.9	同 同 高津村溝ノ口	昭和 2. 3. 9	
	久地梅林	くぢばいりん	2.2	14.9		同 同 同 久地	昭和 2. 8.11	非連帶
	宿河原	しゆくがはら	1.2	16.1	10.3	同 同 稲田村宿河原	昭和 2. 3. 9	
	登戸	のぼりと	1.1	17.2	11.4	同 同 同 登戸	昭和 2. 3. 9	
	㊙中野島	なかのしま	1.8	19.0	13.2	同 同 同 中野島	昭和 2.11. 1	
	稲田堤	いなだづつみ	1.8	20.8	15.0	同 同 同 菅	昭和 2.11 .1	
	矢野口	やのくち	1.6	22.4		東京府南多摩郡稲城村矢野口	昭和 2.11 .1	非連帶
	稲城長沼	いなぎながぬま	1.7	24.1	18.3	同 同 同 東長沼	昭和 2.11 .1	
	多摩聖蹟口	たませいせきぐち	1.1	25.2		同 同 同 大丸	昭和 2.11 .1	非連帶
	南武是政	なんぶこれまさ	1.6	25.8		同 北多摩郡多磨村是政西靜地	昭和 3.12.11	〃
	府中本町	ふちゆうほんまち	1.1	27.9	22.1	同 同 府中町御殿下	昭和 3.12.11	
	分倍河原	ぶばいがはら	.8	23.7		同 同 同 高倉	昭和 3.12.11	非連帶
	本宿	ほんしゆく	1.0	27.7		同 同 西府村本宿	昭和 6.11. 5	〃
	西府	にしふ	.9	30.6		同 同 同 四ツ谷	昭和 4.12.11	〃
	谷保	やほ	.9	31.5	25.7	同 同 谷保村御屋敷	昭和 4.12.11	
	矢川	やがは	1.4	32.9		同 同 同 石田	昭和 7. 5.20	非連帶
	西國立	にしくにたち	1.3	34.2	28.4	同 同 立川町下ノ原	昭和 4.12.11	
	東立川	ひがしたちかは	.5	34.7		同 同 同 下古新田	昭和 4.12.11	非連帶
	(立川)	たちかは	.8	35.5	29.7			中央本線 青梅電氣 五日市鐵道
	(西立川)	にしたちかは	2.1	37.6				青梅電氣

資料 19.『鉄道停車場一覧』（1934 年 12 月 15 日現在）250 頁の一部
国立国会図書館デジタルコレクションより加工して転載

善意の傘が各駅へと設置された昭和 30 年代の地図を確認すると、1955（昭和 30）年 3 月発行や 1960（昭和 35）年編図の地図では再び「やぼ」の表記がでてきており、昭和 10 年代に濁点がとれたと言えなくなってしまうのです[72]。

同一の発行元が継続的に作成した地図であれば、その表示の変化を根拠とできるかもしれませんが、複数の発行元による地図の表記をもって駅の呼称の変化（濁点の有無）を追いかけても、裏づけとしては弱そうです。

今のところ、原田氏が語る西野村長による谷保駅の呼び方の変更は、その証拠となる資料がみつかっていません。本当にそのような事実があったのか否かもはっきりしませんし、開業当初から「やほ」の呼称であった可能性もあります。

それでもこの原田氏の話に魅かれてしまうのは、西野寛司氏が村長であった当時、原田氏は吏員として村役場に勤めていたという経歴をもっているからです[73]。原田氏は、西野村長の間近に居て、その言動

68　国立国会図書館デジタルコレクションで同官報の閲覧が可能です。https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2957359?tocOpened=1

69　『停車場変遷大事典』では、同じ官報の報告で「東立川」に振ってある仮名を「ひがしたちかは」と読んでいます。しかし、この仮名も「ひがし」なのか「ひかし」なのか明瞭でなく、仮名の濁点が略されている可能性を完全には否定できません。

70　『官報』第 5160 号（1944 年 3 月 29 日）662 頁「運輸通信省告示第 117 号」 国立国会図書館デジタルコレクションでこの官報も閲覧が可能です。https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2961666?tocOpened=1

71　鉄道省編『鉄道停車場一覧』（川口印刷所出版部、1935 年）250 頁

72　1959 年 8 月の『国立地区現形図』では、明瞭ではないものの「やほ」と表記されているようです。

73　原田氏が谷保村役場の吏員となったのは 1919 年 2 月であったと、著書の『雑草の記』（逃水亭書屋、1981 年）37 頁にあります。

を見聞きしていた可能性があるのです。

原田氏は、西野村長の為した谷保村への貢献について、その著述で折に触れて語られています。南武線に関しても、「南武線敷設に最も熱意を示したのは、元村長の西野寛司氏である」と述べられています[74]。

さらに、西野寛司氏は南武鉄道の株主という顔を持ち合わせた人物でもありました。

南武鉄道は 1929（昭和 4）年 12 月 11 日に立川まで路線を延伸し、分倍河原～立川間の運輸営業を開始していますが、その当時の南武鉄道の株主名簿をみると、西野氏はその上位に記されています[75]。西野氏は当時私鉄であった南武鉄道において、主だった株主のひとりだったのです。この村長の立場と株主の立場の両方を兼ね備えていた西野氏が、駅の呼称変更に何かしらの影響を与えた可能性がないとも言えません。

南武線の谷保駅が開業した昭和初期、駅名で「やぼ」と呼ばれることに対して、当時の人がどのように感じていたのか、その点をうかがうことのできる記述が、東京商科大学（現 一橋大学）の大学新聞『一橋新聞』に掲載されています。

「『国立』命名物語」と題された 1930（昭和 5）年の記事[76]で、「なぜあの土地を『国立』と命名したのかといふ経緯についてはいまだ本学で関係の人々も知る人は稀である以下その事情をのべてみる」として次のように記しています。

「本学が大正十二年の大震災に校舎の大部を灰燼に帰したのに懲りて地を現在の国立に定めたのが既報の如く翌十三年九月、さて御承知の如くこの地名が『谷保村字谷保』、いくら野暮を看板の商人学校でもまさか新しく設ける駅で駅夫が『ヤボヤボ』と呼ぶのを聞流してはをけない」

この記事の内容からは、当時大学町に新設される駅（現在の国立駅）が、地名の「谷保」から名付けられ、「野暮」と同じ呼び名の駅名となることに抵抗感が示れていることを読み取れます。国立駅の開設（1926・大正 15 年 4 月 1 日）前の『一橋新聞』でも「『谷保村』は文字はいゝが語呂がわるい」と述べた記事[77]がありますが、これも「やぼ」の読みを言っているのでしょう。当時の人の感覚として、「やぼ」という呼ばれ方には抵抗感があったとみてよさそうです。原田氏が言われているように「駅を利用する若い人たちなどから『やぼ』と言って切符を買うのにかっこ悪い、というような苦情が出て」ということが実際にあってもおかしくないとみられます。

谷保駅の呼び方が変更された話は、まだまだ分からないことばかりです。前記の如く、開業当初から「やほ」の呼称であった可能性も十分にあります。当時の鉄道省に何かしらの届出もなさず、村長が「独断」で行えるようなことであったのかという点も気にかかります。

駅名を「YABO」と表記した資料があると一発ではっきりするのですが、なかなか都合良くは出てきてくれません[78]。今後も更なる資料の調査を続けていきますので、何か〝シッポ〟が掴めましたら改めて紹介させていただきます。

おわりに

前段では、冒頭の紹介写真が何を撮影対象としたのかを追いかけ、それに附随して寄附による傘が各駅等へ無料貸出し用として設置された点、その傘がその後どうなったのかの経緯も含めてみてみました。後段はかなり長くなってしまいましたが、傘が設置された昭和 30 年代半ばの各駅の様子や各駅に関わる事項で気になっている部分を取り上げてみました。ここまでお付き合いいただきまして、本当にありがとうございました。

ご覧いただいてお分かりの通り、全くもって「分からない」ことだらけです。私の調査不足・能力不足によって解明できていないところが圧倒的に多いのではありますが、根拠となる資料が見当たらないために判然としない内容もあります。

今回は、聞取り資料なども利用して、実物資料では分からないところ、不足している部分を補って、考察を進めたところがあります。これらの聞取り資

74　前掲註 48 と同じ。

75　例えば、1930 年 3 月 31 日における南武鉄道の株主名簿をみると、全株主 287 名中 14 番目の株主として西野寛司氏が掲載されています。ただし、所有株数の割合では、全体の 0.5%（120,000 株中 600 株）を有するにとどまります。

76　『一橋新聞』№.119（1930 年 9 月 8 日）2 面「『国立』命名物語　谷保村から大学町へ育て上げた教授連」

77　『一橋新聞』№.27（1925 年 11 月 15 日）2 面「さて何とする？町の名駅の名……」

78　英語表記の参考としては、神奈川県から水道調査設計の依頼を受けた H・S・パーマーが、1883 年に提出した横浜水道工事報告書で、谷保村を「the village Yabomura」と表記しているものがあります（『横浜水道百年の歩み 別冊』横浜市水道局、1987 年報告書の 10 頁目）

料は、市民の方々が自らの住まう「地元」へと目を向け、地域の古老たちの記憶を丹念に聞き出し、それを記録として残していただいたものです。行政資料等では記録されない日常生活に根ざした人々の情報が、この記録によって後世へと伝えられています。

各駅へ寄附による善意の傘が設置されたのは、昭和 30 年半ばのことでした。前段でも申し上げましたが、この時期のことであれば、まだご記憶にある方も多いのではないかと思うのです。あるいは、ご自宅に写真等の資料がある方もいらっしゃるのではないでしょうか。どうか、何かしらご存じのことがありましたら、当館まで情報をお寄せください。皆さんからの情報が、資料の不足を補い、空白部分を埋めてくれる貴重なピースとなるのです。何卒よろしくお願い致します。

今回の紹介では、「まごころガサ」の命名者でもある原田重久氏の著作を参考とし、また多く引用させていただきました。同氏もまた、作家として、郷土史家として、資料としては残され辛い記憶や語りなどを、記録として後世に伝えたおひとりでした。

当館では現在、原田氏をはじめ、先ほどの聞取り資料を記録した「くにたちの暮らしを記録する会」にスポットを当て、高度経済成長期と呼ばれる経済成長期において、その開発の波から地域の文化を守り、消えゆく暮らしを記録した数多くの人々とその活動を紹介した企画展示を開催中です。

秋季企画展『歩いて 集めて 見て 聞いて』：11/23（水・祝）まで

秋季企画展『歩いて 集めて 見て 聞いて －消えゆく暮らしを記録せよ－』は、11 月 23 日（水・祝）までの開催となっています。残り期間僅かではありますが、こちらの企画展を是非ご高覧ください。

なお、矢川駅の開設 90 周年記念として、矢川駅と当館、国立市古民家を巡り、各施設に設置された記念スタンプを集めるイベント『歩いて巡ろう 矢川駅 90 周年記念オリジナルスタンプウォーク』も開催中です。当館において記念品も贈呈しておりますので、スタンプを集めつつ各施設を巡ってみるのはいかがでしょうか。

矢川駅開業 90 年の話を聞いて、以前から気になっていた資料を改めて調査・確認し、資料 20 のコンタクトプリントなどを発見したのが、確か桜咲く頃だったと記憶しています。

開業 90 年を迎えた桜咲く頃の矢川駅：2022 年 4 月撮影

この写真紹介。書き始めたのがいつだったのかとデータの記録を確認したところ、何と 5 月 16 日。普段からかなりの遅筆で悪名高きワタクシメではありますが、それにしても今回はかなりのものでした。学芸員は、その業務内容から「雑芸員」とも揶揄されます。この度も何だかんだとありまして、なかなか落ちついて調査している間もなく、まして業務時間中に紹介文を書く時間なんぞはどこにもなく…。とまぁ言い訳はこのぐらいで、なんとか終わりまでたどり着けたことに安堵している次第であります。

【くにたち郷土文化館 連絡先】
HP：https://kuzaidan.or.jp/province/
☎：042-576-0211　FAX：042-576-0216

（2022.11.06 中村記）